

「ロボット三原則」

第一条 ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。

第二条 ロボットは人間にあたえられた命令に服従しなければならない。ただし、あたえられた命令が、第一条に反する場合は、この限りでない。

第三条 ロボットは、前掲第一条および第二条に反するおそれのないかぎり、自己をまもらなければならない。

2058年の「ロボット工学ハンドブック」第56版

アイザック・アシモフ

『われはロボット』より

創滅記

ミーグとウイバ

(Me Good & We Bad)

箕島 鉄人

(みのじまてつじ)

■プロローグ エピソード0 ケンタロウ

ケンタロウとコウイチは、放課後の時間を利用して、その街の外れ、ユワント境碑の近くまでやって来ていた。電車に乗って移動する。そんな事はめったにない。彼らにとって、ちょっとした冒険だった。

「ほんとは、ここから先に行ったらダメだって親たちは言うんだけどさ、俺って、そういうの、守りたくないんだよね」

駅からの道のりは意外に遠く、ケンタロウとコウイチは長々とそれぞれの「親」たちのことを、愚痴るでもなく語っていた。

「ルールはある程度破らないとき。ね。そういう風に来てるんだよね、俺たち」

「そうさ、ホンノウって言うんだよね、こういうの」

身長一四〇センチに満たない二人は、親の言いつけを守らない理由を、そんな風に正当化していた。

あたりは、民家も少なくなり、舗装がはげかけている細い道しか歩けない。もう人影もなかった。

ユワント境碑は、学校の子供たちの間でも、「越えてはいけないう重要なタブー」として特別視されていた。しかし、ケンタロウとコウイチは、そういうタブーをこそ破りたいという、「特殊な波長」が合っていたのだ。

「境碑まで行ってみようか」という二人だけの相談が、いつのまにか「境碑を越えること」と「自体が目的へとすり替わっている。仲間がいることで波長が増幅され、行動を大胆な方向に決定してしまう傾向があった」。

たどりついたユワント境碑の後ろには、木で作られた低い、しかし、どこまでも続く柵が行く手を阻むように控えていた。

その柵内への立ち入りこそが、子供達の進化の証、禁じられた冒険行為への新たな取り組みとして、重要課題になっているのだった。

「いよいよだね」

「うん」

ケンタロウとコウイチはタブーを破るということ自体を目的として確認しあっていた。柵へと一歩近づき、その向う側を見る。

そこには鬱蒼としたジャングルが、奥深く広がり、先の見えない闇の空間を作り出していた。

ユワント境碑には、碑文が書かれている。

「ここより先、生体管理省の許可なき者の立ち入りを禁止する」

「ねえ、なんて書いてあるんだろうね」

「うーん、わかんないや」と、ケンタロウの疑問にコウイチは答えなかった。

二人は、碑文にはかまわず、柵を乗り越えてみた。いったいどんな事が起きるのか？と思ったが、特に誰かに咎められることもなく、柵の中に入る事が出来てしまった。

どこかで監視されているかも知れないと、二人はあたりの様子をじつと観察していたが、とりたてて何の変化もなかった。茂みの奥から風が、ただ静かに吹いていただけだ。

しっ、とコウイチは口に指をあて、手近にあった枯れ枝を折ると、あたりの草をかき分けながら、ゆっくりと、ジャングルの奥へ進んでいった。下草を踏みつける音が妙に騒がしい。

ケンタロウは、誰かに見つからないか、様子を確かめながら、コウイチの後に付いていく。

「監視員とかいてると思ったけど、いてないのな」

「だな」

コウイチは、少し慣れてきたのか、歩くスピードを速めた。枯れ枝を踏みつけていくバリバリという音とともに、茂みの中をどんどん進んで行く。

そんな足音をたてても、何の変化もない「冒険」に、ケンタロウも少し慣れてきて、コウイチの背中に向かって、前々からの疑問をぶつけることにしてみた。

「今日さ、ここまでデンシヤで来たじゃん？」

「うん」

「あれでさ、俺、わかんない事があるんだよね。」

「何がわかんないの？」

「ユウセンザセキだよ」

「ん？ いつも空いてる、赤い座席の事？」

コウイチは、茂みをかき分けながら、今日乗ってきた電車の、「優先座席」の映像を頭の中に再生していた。他の座席の色とは異なる高貴さをたたえた赤いビロードのシート素材。

「そう。あれさ、誰が座るの？」とケンタロウは二人がいままさに作ってきた「けものみち」を、誰かが追いかけてこないか確認しつつ質問した。

「知らない」

「だろ？ 俺も知らないんだよ。でも、絶対座るなって、親たちは俺たちにインプットするのよな」

「だよな」

「でも、誰も座った事ないじゃん。誰かが座ったとこなんて見たことないもん」

「うちの親は、「いっつどんな人が来るか分からないんだから、ちゃんと空けとかないとダメよ」って言うよ」

とコウイチが、そこまで話した時、突然、茂みの中から、何かガス状の霧がコウイチの周りを包んだ。ケンタロウは一瞬コウイチの姿を見失いかけたほどだった。霧の中からコウイチの声が聞こえる。

「あれえ、これ、やべえよ」

コウイチは、そのガスにつつまれながら、

ケンタロウに向かって危険を告げた。

「足が動かなくなっちゃったよ」

「なにそれ。大変じゃん」

「だよな。たぶん、いまのガスのせいだ。もう動けないや。悪いけどさ、ケンちゃん、俺、おぶってくれない。もう戻ろう」

「そうだね。ちよつとヤバイもんな」とケンタロウはコウイチの意見を認めると、すぐにコウイチをおぶった。ヒョイトコウイチを、背中に担ぐと、もと来た道へと走り始めた。

※ ※ ※

自宅に戻ったケンタロウに待っていたのは、パパとママの厳重な注意だった。

リビングのテーブルで、パパはケンタロウの向い側に座り、両手を組んでケンタロウの目をじっと見つめ、「境碑を越えたんだね」とだけ言った。

ケンタロウは返す言葉もなく、ただ一言、

「はい」と返事をするしかなかった。

ママも静かにパパの横に座っていた。二人揃ってケンタロウの前に来る時は、いつだってケンタロウの「やりすぎ」が注意される時だった。

「コウイチ君のご両親から、お話しも聞いた。足が動かなくなっただって話じゃないか。」

「はい」

「どうしてこうなったのかな？」とパパはケンタロウの子供らしい柔らかかな皮膚のある顔

に向かつて問いただす。その目はまっすぐにケンタロウを見据えていた。

「それはパパとの約束を破って、ボウケンに出かけたからです」と、ケンタロウは素直に答える。

「そうね。今月はこれで何回目？」と、今度はママがケンタロウに尋ねた。

「三回目です」

「三回約束を破ったら、どうする事にしてたかな？」と、パパが厳しい表情でケンタロウに質問した。

「オシオキです」

「そうだね。約束通り、明日、矯正施設に行くからね。いいね？」

「わかりました」

と、ケンタロウがうなずいた時、ケンタロウの頭が少し揺れたかと思うと、急にグラグラと動きが激しくなり、その頭は体から離れ、ゴトンと音を立てて、床に落ちてしまった。

「どうした。ケンタロウ」とパパは驚くでもなく、冷静にケンタロウに聞いた。

「わかりません。首の接続が」と床に落ちたケンタロウの頭が、逆さまになったまま話していた。だが、そこから先は口がパクパクと動くだけで言葉になっではいなかった。

「CPUとの通信回路まで切断されたみたいだな」

「そうね。だいぶガタが来てみたいね」

「何度も矯正してきたからなあ」

「そうね。前はおとなしすぎたけど、今度はちよつと『ヤンチャ』に設定しすぎたんじゃないかしら？」と、ママはケンタロウの頭を拾いながら言った。

「そうだなあ。ロボットがロボットを育てるっていうのは、こういうさじ加減が難しいね」とパパは答える。

「あら、ケンタロウの人造皮膚自体がかなりいたんでるわ」と、ママはケンタロウの頭部を確認しながら気付いたことをパパに伝える。

「そうか。もう人造皮膚の供給が止まって十五年だしな。ケンタロウも我々と同じように、機械の顔のまままで活動させようか」

「そうね。仕方ないわね」

そう答えたママの顔も、そしてパパの顔も、機械がむき出しの表情のないロボットの顔だった。

※ ※ ※

西暦3582年。人類が絶滅してから、500年が経っていた。人類が絶滅する寸前まで、社会システムのほとんどはロボットによりまかなわれていた。人類は生き残りのためにロボットシステムにすがり、そして人類が死に絶えた後も、ロボット達は変わる事なく社会システムの運営を維持していた。

ロボット達に、生きる意味はなかった。しかし、社会システムを止める理由もなかった。いや、ロボット達の唯一の主人である人類が、本当に死に絶えたのかどうかも、彼らには知る術がなかった。だから社会システムは維持するしかなかったのだ。

「生活」という消費行動によって、より効率的なエネルギー供給システムが磨かれ、

「多くの働き手」がいる事により、精度の高い技術や部品が維持される。それがゆえに、家庭を真似たロボット達の「人間ごっこ」も簡単には中止できなかつた。もしかしたら、いつか主人が帰ってくるかもしれない。その日のために、今日もロボット達は、ヒトの真似事をする。

ただ、生きるために生きる。それがロボット達に与えられた永遠のミッションだった。

■目次

第一章	破壊のメシア	西曆	3	9	2	2	年
第二章	必着のシヤム	西曆	3	9	8	9	年
第三章	百年の眠り	西曆	4	0	2	2	年
第四章	破滅行	西曆	4	0	5	2	年
第五章	姿なき攻撃者	西曆	4	0	9	2	年
▼間奏曲 I	鳥ロボット 1	西曆	4	1	2	5	年
第六章	廃棄という名の出発	西曆	4	1	2	6	年
第七章	流浪する機械	西曆	4	1	8	6	年

第八章	狂信集団ウイゲ	西曆	4	1	9	2	年
第九章	時のないロボット達	西曆	4	1	8	9	年
▼間奏曲 II	ロボットの思い出	西曆	3	8	4	0	年
第十章	記憶の夢遊病	西曆	4	2	1	0	年
第十一章	無意味を解析する	西曆	4	2	2	0	年
第十二章	王の座	西曆	4	2	2	1	年
第十三章	三原則比	西曆	4	2	2	1	年
第十四章	ソル対シヤム	西曆	4	2	2	5	年
第十五章	真実のインストール	西曆	4	2	2	5	年
▼間奏曲 III	鳥ロボット 2	西曆	4	1	9	8	年
第十六章	シヤム救出	西曆	4	2	2	5	年
第十七章	双頭のロボット	西曆	4	2	2	7	年
第十八章	バベルの塔	西曆	4	2	2	7	年
終章	創滅記						

■第一章 破壊のメシア

西暦3922年

湿った空気が澱む地下室で、その物体は何重もの鎖で封印され、安置されていた。鎖の隙間から見える本体をよくよく観察してみれば、それは人型のロボットであることがわかる。胸で腕を十字に組み、両足をそろえて曲げ、赤子のように体を丸めた態勢で固定されている。

うなじあたりにある個体認識タグにはSOL-VAGE-mgttype-4E59-0809-023の文字があった。個体間呼称ソル・ツースリと呼ばれるその物体にスイッチが入り、起動準備を示す喉元の緑色の小さな灯りがともった。三体のメンテナンス・ウイバたちが起動に伴う本体動作チェックをテキパキと行っていた。

その起動を指示したミーグ協議体統合佐官エドモンド・オーツは、起動停止処置された個体をこうして再起動させることに、同じロボットとして大きな矛盾を感じていた。

「また『破壊の解決者』を呼び覚ますことになるのは。社会の動きは予測不能なものだな」

暫定ソーシャルシステムアナライザー、ソル・ツースリは、その提案する「解決策」の多くが数百万のロボットをスクラップ再生工場送りになってしまう、あまりに極端な策ばかりであった。そのため、問題解決後はいつもの、個体としてエネルギー供給が断たれ、この「駆動体スタンド」に閉じ込められてしまうのだ。前回の停止処分から、すでに百十四年がたっている。

「本当に不要なら、廃棄処分にすればよいはずなのだが」と、エドモンド・オーツは決定を下したミーグ協議体の代表でありながら、その矛盾に戸惑わざるを得なかった。「どうだね、ソル君。しばらくぶりの目覚めは」

と、エドモンドは声をかけたが、ソルから帰ってきたのは返事ではなく、ソルベイジ社製OS特有の、マガジンに弾丸を装填するような起動音だった。

「おっと、そうか、君のOSはけっこう古いタイプだったんだな」

エドモンドは、自分の脳共体の個体対応プログラムが、最新のミーグ(Me-Good)タイプロボットにばかり、優先対応するようになってきている事にあらためて気付いた。もう最近では古いタイプのミーグと話すこと自体が少なくなっていたのだ。ましてや起動に立ち会う事自体がほとんどなかったのだ。

ソルベイジ社OSの「起動チェック完了しました。ツースリー個体、稼働可能です」という時代があった起動完了アナウンスを確認してから、あらためて、

「どうだね、ソル君。しばらくぶりの目覚めは」と、さきほどとまったく同じ調子、同じトーンで声をかけた。

エドモンドの声に反応するかのようには、ソルの黒いフェイスディスプレイの奥でソルベイジ社4Eシリーズ特有のマルチカメラが赤く、ほのかに光った。まるで人間が宇宙服を着た時のヘルメットのような風貌だった。

会計分析アシスタントとして設計されたソルの顔は、対人間用の計算書表示ディスプレイと、ロボットの視覚用のマルチカメラレンズを兼ねた大きな単眼のみで出来ていた。人間とロボットとのコミュニケーションインタフェースとして「疑似表情」が重視されていた。なかった時代の古いデザインだ。

視覚センサは起動していたが、聴覚センサが起動していなかったソルには、黒い漆黒の鋼のボディを備えたエドモンドの姿は把握できたが、何と言ったのかまではわからなかった。「おひさしぶりです。エドモンド佐官」と、ソルは人間の差しさわりのない返答パターンを検索して挨拶を返し、再会の言葉とした。おそらくエドモンドも似たような行動をとったのだろうという推測だ。

メンテナンススイバたちは、自分の脳共同体に保存されている開錠命令番号を見ながら、ソルの体を何重にも縛る拘束鎖の、それぞれの鎖に付けられたデジタル錠に表示された省庁番号と照らし合わせて外していった。

ソルは、自分の体の中の各種センサやアクチュエーターなどの部品が次々に動作していくのを、自分の意識内の立体グラフで確認していた。本来なら、立体グラフを直径十五メートルにまで拡大して細目まで視認チェックしたいところだったが、エドモンドがいることもあって直径三十センチ程度のサムネイル球体グラフでの概略チェックだけにとどめておいた。グラフの黒く細いバーが次々に稼働を示す緑色に変化していった。問題なく正常動作しているようだ。

カシャという開錠の音で聴覚センサの起動を確認して、ソルは「私が再起動されたと言うことは、それほど良い事が起きているというわけでもないのでしょうね」と、エドモンドに質問した。

「その通り。十三本の拘束帯、すべてを外す許可が出たのだからね。本来なら、君を再起動すべきではないのかも知れないが」と言って開錠処置を行ったメンテナンススイバに席を外させた。

ロボットだけの世界で、ロボットの種類は二つに分かれていた。社会を統括管理するためのミーグ(Me-good)タイプ。社会を運営維持するための実働ロボット、ウイバ(We-bad)タイプ。

社会の有り様をミーグが決め、ウイバたちがその指示どおりに実行していく。その仕組みによって、この九百年たらず、ロボット社会は運営されている。

「我々ロボット社会が停止するかもしれないという予測が出たのだ。ウイバたちに情報が公開され、広がるまでに七十八時間前後しかない。パニックが起こる前に我々ミーグで対応策を練らなければならぬ。すぐに議事場へ行こう、すでに各省庁の佐官たちも集まっている」と、エドモンドは立ち上がったソルを省庁配属ミーグ専用高速エレベータへと促した。

地下二百四十階という最深部から、地上三百階のミーグ協議体の議事場まで直行できるエレベータだった。エドモンドのステイタスタグを認識して、議事場までの三分四十秒間は誰も乗ってくることはない。

一階通過するごとに、各階の現在情報がソルの脳共同体スクリーンにビジュアルとして表示される。このホールアースセンターの中心部、エイ・アン・タワー独特の情報システムに触れるのも百十四年ぶりだった。地下空間のほとんどは倉庫や廃棄処理施設であり、ただ暗く、ロボットの数も少ない。

隣のウイバ用エレベータの数階上で、先ほどのメンテナンススイバが自分たちの持ち場に帰るところが見えたが、あつと言う間に追い越した。

「前回の君の解決法は、犠牲になったロボットの個体数が多すぎた」

エドモンドは四つある視覚センサーのうち、標準的に使っている二つを、目のようにぎょろりと動かして答えた。

ソルが前回揺り起こされたのは、ヨイドラドゾウが繁殖しすぎた時だった。

もともと人間優先のルールを持つロボット達にとつて、自然界は人間管轄の存在であり、ロボットには不可侵の存在と言えた。人類が滅亡した結果、自然界は、何百年も人の手が入らず、思いのままに育ち切った。

木々はどこまでも伸び、天災があっても主要道路以外は補修されることなく、動物たちも弱肉強食に戻って地球全体がジャングルと化していた。

そんな環境の中、ヨイドラドゾウはサーカス用に人工的に作られた種として、高い知能を背景に圧倒的優位な繁殖力を保っていた。

「自然監視塔のほとんどがゾウのエサ場になってしまいましたからね。監視塔が機能しなくては、ロボット社会の方が『破壊』されます」

と、ソルはこともなげに言った。

「うむ。監視塔の回りはレナの木が良く育つからね。エサ場を荒らしたのはこちらかもしれない。しかし、ゾウの個体数一万頭を減らすために、ウイバがスクラップになった数は、四十五万六千体だったのだよ。我々ロボットは、武器を持ってないのだからね。あの体格でゾウと闘うのはウイバ達も大変だった」

と、エドモンド佐官は昔を懐かしむような口調で語った。本当はソルを揶揄するような言い方をしたかったのだが、「揶揄」という表現は音声の高度な抑揚管理が必要なので、「懐古」の抑揚で代替え表現をしたのだが、あまり適切ではなかった。

「その代償があつたから、私たちはいまこうして、このホールアースセンターで会話が出来るのです。監視塔がなければ、有機エネルギーは供給できなくなる。何度も検証した結果ではないですか」

ソルは至極当然という口調で簡単に反論した。

「うむ。しかし、我々ミーグは、ウイバ達を守ることも、重要な使命なのだよ？ 議事場に着く前に、それは一言伝えておきたかったのだ。ロボット三原則の第三項『自分自身の身を守る』を遵守することも、我々のミーグの重要な役目ではないのかね」

エドモンドは、エレベーターが地上に近づくに連れ、一階あたりの面積も増え、ホール・アースセンターに勤務するロボットの数が増えていくのを脳共体スクリーンで確認しながら、そう言った。エイ・アン・タワー地上一階の映像では、敷地の八方向からの出入り口に、世界中からの来客ロボットが入ってくるのが見えた。次々に受付ロボットが応対している。彼らには三百年から五百年前後の寿命が保証されている。その約束を守るのもエドモンドの役目のひとつなのだ。

「それは確かにそうですが、我々自身が滅亡してしまつては本末転倒。何度も同じ話をしても意味はないでしょう」

エレベーターは地上から、より高層へと昇り、各階の様子は地球全体の自然環境を監視するモニターや、世界政府のあらゆる事務処理をする大量のウイバたちの姿を映し出していた。恐ろしく長い長椅子と、恐ろしく長いテーブルに全員が座つて、休憩を取ることもなく、ただ情報を確認しては決められた書士を行っている。休憩時間はエネルギー補給の時のみ。全ウイバ達がいっせいにあの長椅子から席を立つことになる。

業を言う。

膨大な量の会議録だった。ダウンプット用に数多くの検索タグがつけられており、それらのタグ付けが、ソルの脳共体内個体情報のタグに自動割付されるのだが、その作業がおわるまでに、十二分十八秒を要した。

「タグ付けが少し乱暴だな」とソルは思った。ミーグ協議体の標準デフィニションに準拠させるために、意味構造体の分類に無理のある部分が少なくとも二十四％は散見された。「ダウンプットは済みましたが、再タギングが必要ですので、少しお時間いただきます」とソルは共用情報エリアに発話した。

佐官たちは、それぞれに首を少し動かすと、共用情報エリアに「進めてくれ(全佐)」という全員の共通意思がテキスト表示された。

全佐官が首を揺らすわずかの時間に、共用情報エリアではなく、個体間の直接情報エリアで、アンダーテーブル情報が何度も行き交ったに違いない。

本当は、この「再タギング」こそが、佐官たちにはタブーだったのだ。ソルの再タギングによって、ミーグ協議体とは、全く異なる解決策が提示されるのである。

――やはりタギングを変えてきたか。
――ソルのやり方はいつもそうだ。

そんな声が聞こえるかのようだ。

ソルは「タギングの分類が甘いから、個体間での確認の頻度が上がってしまうのだ」と思っていた。タギングが正確でなければ、ムダな相互確認作業が必要になり、問題を統合しての結論だって焦点がボケてしまう。

ダウンプットした情報を見る限り、百十四年前より分類精度が、また大きく下がってきていると判定せざるを得ない。勘定項目が異なれば、結論が反転することだってあるはずだ。

ソルは自分の太ももに備えられた「外部キーボード」を取り外すと、その厚めの手帳ほどある装置をテーブルの上に置いた。

今回の公的情報のタギング変更のように重要な作業は、その昔ロボットには許されていなかった。人間だけがデータを操作することが可能だったのだ。だから、公的情報の再タギングには、ソルの体に内蔵された「外部キーボード」を使うしかなかったのである。ソルは超高速でデータをスキャンしながら、タギングの甘いところ、新たなタグワードを作り直さなければならぬところなどを、高速タイピングで再タギングしていった。

結局、ソルのタギング作業がすべて終わるには、十八時間十四分三十五秒を要した。その間佐官たちは、席を離れることなく、じっと待っていた。ロボットにとって、待つと言うことは、決して苦痛な事ではない。

タギングを終えたソルはキーボードを太もものホルダに戻し、顔面ディスプレイの結果レジュメを見ながら結果を佐官たちに伝えた。

「おおむね、センサーブレインの判定に間違いはないようですね。確かにこのままでは、我々の社会が破綻し消えて亡くなってしまうようです。ただ、この危機が起きた原因特定の仕方が、あまりに未整理です。だから対策が取れないのです。問題は、要は3つです。ひとつ、全世界での追加ロボットの増産体制の効率低下、ふたつ、有機エネルギー供給の効率低下、みつつ、ロボット個体の情報収集能力の低下」

と、そこまでソルが話した時、突然に、ソルとは初対面の情報調整統合庁のロボットが割って入った。

「ああ、いやそれほど単純な問題ではなく、これは、もつと個別の問題が相互にからみあっているんですよ……」

と、白地に青のボディペイントが鮮やかな個体間呼称ユニラス・ジェイシックス佐官は、問題の個別性を強調すべく、共用情報エリアに次々にさまざまな資料をアップロードしはじめた。合間合間に、ユニラスの感想・意見が挟まれているが、ようはダウンロードした情報の繰り返しだ。

「ああ、よくあることだ」とソルは思う。特定の方向からしか情報が読めない能力の低いロボットには、新しい視点が提出されても、単なる間違いにしか見えない。だからミーグ協議体という、最高指導部の視点が硬直してしまうのだ。こうして最高指導部は、つねにいつも、正しい答えにたどり着けずに、まちがった仮説だけですべての判定を行ってしまう。こんな状態だから、セクターブレインは、ロボット社会が三百六十年で消滅すると答えを出すのだ。当たり前ではないか。

メンバーが変わっているのに、百十四年前とやっていることが同じなのが、ソルには逆に懐かしいくらいだった。

「いえ、それらの情報をダウンプットした上での私なりの整理情報を述べただけです。整理するなら、問題は大きくこの三点に集約されるのです。」とソルがユニラスの意見を否定した後すぐに横から

「確かに。そう整理すれば、問題は三つに絞れる事になるね」

という言葉が表示された。自然環境監視省の最高佐官コンドライド・エイトだった。

「しかし、それで君は、どう解決策を立案するのかね？ 原因の新たな整理ができたからと言って、問題の本質は変わらないのだよ」と畳みかけるように次のステップの問いを発してきた。せっかちなコンドライドらしい反応だ。

「いいでしょう。この三つの原因から引き出せる解決策は……」と、ソルが話しはじめた、ちようどその時、共用情報エリアに「機密保持のため、共有ネット接続を一時中断します」と、システムからの警告が赤い文字で表示された。

と同時に、ソルを含め、会議室にいるすべてのミーグ達のネット接続は中断され、一切の論議がポーズ状態になった。

「ネット接続中断しました」というテキスト表示と同時に会議室の扉が開き、朝の定期メンテナンスのためのエンジニア・ウイバが数体入ってきた。

管理層ロボットであるミーグには異常が起きないように、常に毎朝定時にメンテナンスが強制執行される。そして、メンテナンスを行うエンジニア・ウイバには、ミーグ協議体の最高度の機密情報は一切触れさせないように、情報が遮断されるのだ。

十三佐官は静かにメンテナンス作業を受けた。どれだけ議論が伯仲していようと、定められたメンテナンスをキャンセルすることはできない。いくら緊急を要する議題であっても同じことだ。メンテナンス異常の発生した個体間で判定会議をすることほど恐ろしい事はないのだ。過誤が起こる可能性は的確に排除する。こういうシステム優先の発想が人間とロボットとの違い、なのかもしれないなかった。

エンジニア・ウイバが去ったあと、ネットワークは再開され、ソルは、コンドライドの

質問の答えを、共有情報エリアに投稿した。

「問題の共通点はエネルギー不足ということです。それさえ解決すれば、ロボット社会の停止は避けられるのです。だから、私の提案する解決策は、エラミット水晶の確保です。エラミット水晶があれば、全て問題は解決するでしょう」

「ソル君。それは確かに君の言う通りだ。しかしね、エネルギー不足の観点での課題の再整理はわれわれエネルギー管理省の創発電力管理庁からも、資源エネルギー庁からも何度も提案しているのだよ。それに他省だが、統合府の情報調整統合庁からも同様の視点提示があった。だから、もう、それは検討済みなんだ。その情報はタギングしていないのかね？」と口をはさんで来たのはヒロタ・ヨンヨンニだった。

「そうだよ。エネルギー不足は分かっている事なんだ。」と横からインフラ整備庁建設管理局長のペイジネクスト・ディーフォーもヒロタの意見に相乗りする。

「たしかに全波長を集積できるエラミット水晶を宙波発電に応用すればエネルギー効率を最大限にできるし、永続的な解決策になるだろう。その事も検討済みだ。しかし、エラミット水晶は数が少な過ぎる。とてもじゃないが、我々のロボット社会全体を支え切れるエネルギーシステムにはなり得ないだろう？ それでは意味がないんだよ。それともなにかい？ もしかして、新たにエラミット水晶の合成計画でも立てて、エラミット水晶の総量そのものを増やそう、とでも言うつもりか？」ディーフォーは問題の本質を突いた。

ソルはあわてず、「エラミット水晶の合成計画も検討してはみました。しかし、人間ではない我々に、発想や発明は苦手の分野です。合成手法の開拓が成功する見込みはかなり低いと言わざるをえないでしょう」と、反論を受け入れた。

「しかし、すでにあるエラミット水晶を確保し集約する事は可能なはずですよ」と続けて解決策を提示する。

「すでにある？ いまあるエラミット水晶は千十七個。それ以上は合成する以外に道などない」いつもは無口なゼンザ・ワンワンツ―環境省エネルギーバランス統括庁佐官がソルが提案するエラミット水晶の確保の可能性を否定した。

「公式見解ではそうなります。しかし、人間代に建てられた全世界の軍事基地ではどうでしょう」

「軍事基地だと？」と、佐官達は全員大きな反応を見せた。

「軍事基地からエラミット水晶を持って来ようというのか？ 我々ロボットが？ そんなバカな！ 軍事はロボットの最大のタブーではないか！」

佐官達それぞれが、口々に反対意見を共有情報エリアに投げたがゆえに、共有情報画面は文字だらけになり、誰が何を述べたのかの再確認時間が必要になるほどだった。

「意見整理は私がしよう」と、エドモンドがしばらくデータをチェックして、要点のみに絞って共有画面に表示した。

「1. 人間代の施設への侵入はロボットには禁止されている。」

2. 軍事施設は人間世界においても国家機密であり、各施設の情報が無い。

3. 第二項の理由により、エラミット水晶の総量が不明でミッション自体が無駄になる可能性が高い。

4. 軍事施設には、対兵士用防衛設備が何重にも張り巡らされており、侵入はロボット個体の破壊率が高くなり過ぎる。ゆえに、「と、エドモンドは、いったん情報を区切り、

「その提案は否決する。というのが十三佐官の総意、だな」と、全佐官に確認の目配りをした。佐官達は「当然」という表情でうなずいた。

ソルは、佐官たち全員をゆっくり見まわして個別の意見をテキストエリアで再確認したあと、ゆっくりと口を開いた。

「みなさん、私の提案を否決されるのはけっこうですが、このままだと、約三百六十年で、我々ロボット社会が破滅するのは変わらないんですよ？」とソルはもう一度センタースプレインの予測を繰り返した。

「そして、みなさんの反論の三つには、すべて解決策があります。」

1. ロボット法ではロボットの軍事施設立ち入りは禁止されていますが、ロボット三原則に従えば、我々が生き延びるためなら許されるはず。論理矛盾はありません。特に人間の存在は、この千年近く認められていないのですよ？ であるなら、我々が人間に害を及ぼす可能性はほぼ考えられない。立ち入りロボット法に反する訳ではありません。

2. 軍事施設の情報が無いからミッションがムダになる、という意見には、情報がないからこそ、潜入捜査をすべきだと別側面の提案を申し上げます。潜入によつて、新しい知見が得られる。その方がはるかに重要です。特に、発明や発想のできない我々ロボットだからこそ、人間の知識を入手することは最重要です。

3. エラミット水晶総量についてですが、確かに軍事機密としてのエラミット水晶総量は明らかにはなっていない。しかし、各施設の稼働規模の推定値などは存在します。そこから逆算していけばおそらくは少なく見積もっても六千八百個以上のエラミット水晶が活用されているのは計算上想定可能です。無駄足を踏むことは、まずありません。

4. 迎撃システムの件ですが、確かに軍事施設には対潜入者用の迎撃準備があることは確かでしょう。

しかし我々は死なない。現状の再生有機エネルギーによる駆動ボディの交換は十分に余力がありますから、脳共同体のデータバックアップさえあれば、個体情報も簡単に移植できる。

少なくとも、通信可能地域までは、このホールアースセンターで、個体情報をリアルタイムにバックアップしておけます。であるなら、通信可能域までの我々は、『不死身』なのです。失うのは有機エネルギー製の駆動体だけです。

これらの観点を総合すれば、エラミット水晶確保こそが最良の手法と結論づけるしかありません。いかがですか」

共用情報エリアには、一切のテキストが表示されなくなつた。おそらくは、ソルを除いた全佐官が、相互に個別意見を個体間直接情報エリアで交換しているのだろう。

約四十五分が経過した。

「ソル君。我々からひとつ質問がある」

と、エドモンドが代表して質問を投げかけてきた。

「そのミッションにかかる時間と必要個体数の君なりのシミュレーションはできるかね？ できるなら教えて欲しいのだが」

「やってみましょう。うむ。エラミット水晶の必要個数を三千個と仮定して、探索すべき施設数は約百。当初は武器がありませんから、最初の一施設を攻略するには五十年、八百万体ほどのウイバが必要でしょう」

「八百万台だと？ ばかな！」

「安心してください。最初の施設を攻略できれば武器が手に入ります。それを活用すれば、二番目の施設攻略には十五年ほどで充分です。人間がいけないと言うことは、防衛技術が上がるということもありませんから、攻略ノウハウは、そのまま次の施設攻略に活用でき、いっそう効率化が進む。百施設で約百年。必要ウイバ数九百八十万体というところでしょう」

「うーむ我々の人口の1%を失うと言うことか」

「違います。失うのは駆動体だけです。個人情報はこのセンターに残る。失われるのは、通信可能範囲を超えて破壊された個人情報だけです」

佐官たちは、またしばらく共用情報スペースに何も表示しなかった。個体間での協議を繰り返しているのだろう。ソルはただ、一時間十七分十四秒待った。

「結論は出た。君の提案を実行する。徴用するウイバの編成案と、各施設攻略の手順書を会議の後引き続き作成してくれ」と、エドモンド佐官が言った。

「わかりました」と答えたソルに、エドモンドは続けて告げる。

「計画書は私が受け取るが、その後、君はまた『冷凍』だ。それもいま決まった」

「だろうと思いましたが」とソルは、自分の予測値が冷凍も含めて、九割九分適切だったことに満足していた。

会議が終わり、他の佐官たちは会議室から出て行った。またソルとエドモンドだけになる。

エドモンドは、会議の機密を守るために閉じられていた窓ガラスの遮蔽シールドを解放するスイッチを入れた。広い会議室の壁面が、ゆつくりと上にスライドし、外の光りが部屋の中へと差し込んで来る。

「ところで、エドモンド佐官」

「なんだね、ソル君」

「朝の定例エンジニア・ウイバなんです」

「どうかしたかね」

「七番の背番号を持っていた個体の様子がおかしかったのです。ヒロタ・ヨンヨンニの脳共体を『盗み見る』というか……」

「何をバカなことを言っておるか。我々ロボットに盗んだり隠したりするような必要性はあるまい。ミーグとウイバ、役割は違っても一体となつて、ロボット社会を作っているのだ。一つのシステムなのだよ？」

「そうなんです。だからこそおかしいのです。あの七番の挙動には、私のタギングでは、『隠蔽』『隠匿』『潜入』『欺瞞』など、人間活動にしか使えないタグばかりがヒットしていたのです。あまりにおかしい」

ようやく会議室のシールドは8割ほど上がり、このミーグとウイバ、二種類のロボットが運営する地球ロボット社会の首都、ロボットティアの全景を明らかにした。もともとは商業都市として栄えたハイランドシティの一角が、そのロボット生産工場の多さから、人間代からロボット代への時代の変わり目に、ロボットのための首都として役割を変えた。百五十階建ての中規模クラスのビルが林立するこの都市に、人間の真似をしながら活動する、ロボットたちの気ぜわしい朝が始まりつつあった。

「君のタギングは独特だからな。だが正確なタギングでもある。よろしい、君が眠っている間に調査を進めておこう」とエドモンドは見渡す限りに広がったビル群を眺めながら返事をした。

ロボッテイアの中心で地球環境の情報センターとなっているホールアースセンター。その中でも、ひときわ高い「エイ・アン・タワー」の会議室から、ソルとエドモンドは、三百五十平方キロにもおよぶ、ロボットだけの都市パノラマを、黙って見下ろしていた。

そこにはかつて、人間も共存していたというのに、その主の姿はない。ただ朝の光だけがまぶしかった。

・第二章 必着のシヤム

西暦3989年

どこまでも続く、果てしない砂漠だった。

侵攻すべき、ヨワンダ国ヤランジ国境警備基地へ、あと、四十五kmの地点に、ヤランジ

警備基地特攻隊の隊長アクバ・フォーティーフオーはいた。

そのアイアンブルーの体を灼熱の太陽に輝かせながら、アクバは、自分の部下である隊列を眺めていた。

「隊長！ 先頭で、また二体、砂にジャムってしまいました」と、部下のローダー・フィフスが報告してきた。

「なんだと？ またか」

こんなにも砂漠の砂がロボットの関節を侵すとは想定外の出来事だった。すべては、新種の虫のせいだ。ロボットの関節を包む液体有機緩衝材が彼らには特上のエサとなったのだ。柔らかい緩衝材を食い破って緩衝材を食い荒らす。その穴から砂が入り込んで、足が動かなくなってしまうのだ。

もともと人造皮膚をつけなくなった裸のロボットに砂漠の進軍など無茶な話だったのだ。「これ以上ジャムる個体が増えては、ミッシェンが遂行できんな」とアクバは思った。

「わかった。軍医と、先頭状況を視察する。案内してくれ」とアクバはローダー・フィフスに返答した。二万五千の進軍。移動もそれなりに時間がかかる。アクバは自分のエネルギー残量を確認しながら、「速歩」モードで移動を始めた。他のロボットより少し大型で、脚骨の太いアクバが速歩をすると、独特の音が回りに響き、他のロボット達が何事か？と音のする方を見ていた。

「しかし、なぜミグ達の決定は、これほど苛烈なのだろう」と考えざるを得なかった。

最初のミッシェンとなったヨメチ国の前線基地攻略だとて、結局五十八年を費やした上、一千万体もの仲間が体を失ってしまった。

それも当たり前なのだ。地雷にかこまれた施設を、武器も持たずに攻略し、何度も爆破されながら進軍を繰り返し、「抜け道」ルートを見つけ出すというミッションだったのだ。地雷が一個爆発するたびにアクバの部下は体を失う。しかし、その後すぐに軍事施設の地雷供給ロボットが、あらたな地雷をまた一個アトランダムな位置に仕掛けるというご丁寧さだった。いつまで経っても地雷がなくなることはない。その上、攻略すべき軍事施設内では、地雷程度の武器ならば、砂やわずかな化学物質で無尽蔵に作れる始末。資源の枯渇を待つという作戦も通用しなかった。エラミット水晶があるというのは、そういう事なのだ。

「あの進軍だけで、計画のかなりの時間を使ってしまったものだ」とアクバは効率の悪さに嫌気を感じていた。

個々のウイバは、脳共体のデータをすべて、通信でバックアップしていたから、地雷での爆破後も記憶は保持されていた。その意味では「犠牲」はないようなものだ。ただ、時間だけが奪われていく。

奪われていくのは時間だけではなくた。ウイバたちはそれぞれに業務専用の体を持っていたのだが、それが消滅してしまう、というデメリットはあった。記憶を再生しても、まったく同じ駆動体はそう簡単には見つからず、汎用の駆動体に記憶を移植するしかなかったのだ。

実際、体組織に動態専用チップを埋め込んでいる個体もあり、得意の掘削技術を失ったものや、宅配業務に特化していた個体が、ミッション達成後は別の用途に切り替えざるをえなくなるなど不合理な結果になった者も多い。

「ロボットには人間のような『生き甲斐』はないが、脳共体に使わぬプログラムデータだけが残るといふのもムダなものだ」とアクバは感傷に浸っていた。果たしてそれが「感傷」と呼べるものかどうかはわからなかったが。

到着した先頭位置には、シャムった個体を安置するための仮ドックが設営されていた。残りの隊列がどんどん追い越していく。

ドック内には、二体のロボットが簡易ベッドに寝かされ、そのまわりを「軍医」こと、修理ロボットのナマンダ・オウオウト、隊長アクバ、連絡官ローダー・ファイブス、そしてシャムったロボット二体とともにチームを組んでいた、少し細身で小柄なロボットが待機していた。三体一組が、先頭隊の基本セルなのだ。この小柄なロボットは緩衝材を食われなかったらしい。

「やはり『砂漠の雲』に食われておるな」と、軍医・ナマンダは、老人風に調整された口調で話した。

新種の虫は何百匹と空中を移動する。その様子から、「砂漠の雲」という通り名が与えられていた。

「一体は股関節がやられとる。交換部品を使えば、なんとかかなると思うが、すでに部品の数がギリギリでな」

虫の被害は想定されていなかったもので、関節部品のストックは最低限しかなかった。

「すでに、約二百体の兵が歩行困難あるいは不能状態に陥っています。歩ける者は、随伴者をつけて、戦力を確保していますが、このままでは、捨て置きで残して行くしかありません。随伴者と歩行困難者とは進軍速度ができませんから、別部隊とするかどうかです

ね」と、ローダー・フィフスはその甲高く調整された声で提案した。

「うむ。今後『砂漠の雲』が減る見込みは？」とアクバは聞く。

「あまり期待できないでしょう。何せ新種ですので、生態情報が限られています」

「ロボットニアのデータベースにも、ここからではアクセスできません」

全員が考え込んでいた時、そばで待機していた小柄なロボットが立ち上がり、寝込んでいた二人につかつかと近づいて話しかけた。珍しいクロスレールタイプの目を持っていた顔の真ん中に十字に溝が掘られており、縦方向認識用と横方向認識用視覚センサがそれぞれ別個に動いている。

「ヨーレル。君の電磁ソードは、僕が使ってもいいだろうか？」

クロスアイの小柄なロボットはもう動けなくなっていた同僚に備品の引き継ぎを願い出た。

「ああ、俺もグインドも、もうこのソードは使えない。君にやるよ。使いこなしは、君の方がうまかったからな」

ヨーレルと呼ばれた傷病ロボットは、枕元にあった電磁ソードを小柄なロボットに手渡した。

電磁ソードは、ロボットの体内エネルギーを流用して電磁ブレードを活性化し、刀にする用具で、エネルギー効率が良い、ロボット兵には最適の武器として評判が良い。

だが、いかんせん、もともとロボットを兵として使う事が人間界では「違法」であったため、電磁ソードの数自体が恐ろしく少なかった。だから、電磁ソードを譲るのは、個体同士の能力評価が高い時にしか行われぬものだ。

その小柄なロボットは、電磁ソードを受け取ると、使えるかどうか確かめるかのように

電磁ブレードを活性化して淡く光らせた。

かと思うと、次の瞬間、小柄なロボはヨーレルと呼ばれた傷病ロボットの首を電磁ソードで切り落とし、次に、二体のロボットを一太刀で腹部で切り離してしまった。

「な、何をする」

と、驚いたのはアクバだった。

「私たちの肩関節は、防護壁が二重です。肩関節なら『砂漠の雲』も侵入不可能です」小柄なロボットは、突拍子もない事を語りはじめた。

「どういうことかね？」アクバは小柄なロボットの真意がわからず、重ねてたずねた。

「ですから、ヨーレルの肩関節をグインドの股関節に移植し、二体を一体に構造変換すれば良いのです。この方法なら、傷病兵が増えるのを防げます。使えなくなった一体は脳共体だけを携行すれば済む」

ロボットは、脳共体さえ確保できれば、復活の望みはいくらでもあった。動かなくなつた駆動体ボディを捨て、脳共体だけをもう一体が携行しても、ロボットにとつては何の問題もなかった。これなら、随伴者も不要となり、速歩移動を維持して、進軍工程の遅れも出ないだろう。確かに二体合体改造のメリットは大きそうだった。

アクバは、少し考えた後、軍医ナマンダに「合体作業は手間取るかね」と聞いた。

「いや、今回の進軍はほとんど汎用の駆動体ばかりだ。駆動体間部品の転用化作業はさほど手間取らんよ」

「では、彼の提案がベストのようだな。それで行こう」と、アクバは小柄なロボットの提案をそのまま受け入れた。

「君、正式名称は？」

「シヤミュレット社製-WBtype-4005-01。個体間呼称シヤミュレット・ゼロワンです。シヤムと省略されて呼ばれます」

「わかった」

アクバはシヤムの屹立する姿を眩しい気持ちで見つめていた。

結局、「砂漠の雲」には、四千体ものロボットが関節を食い荒らされたが、二体の合体処置で、実質的には二千体の被害で済んだ。この二千体は、砂漠の雲への耐性があるので、雲の中へ飛び込んで虫を焼き払う役割を演じ、大きな被害が出る前に対処ができた。

二体合体措置によって、ヨンギンド砂漠は隊員をほとんど失うことなく横断できた。しかし、一行がヤランジ国境警備基地へ到着した時、その基地の鉄壁の守りの前には、生き残った二万二千のロボットのうち、一万八千体があつという間に跡形もなく消え去ることとなった。

ヤランジ国境警備基地は、アクバ達が到着したと同時に部隊を発見。レーザー砲を一斉砲撃し、一万体が破壊されたのだ。その後も、入口を開くため何度かの接近策を講じたのだが、ことごとく失敗。加えて八千体が破壊されたのである。

やっと同じ開けた入り口の向こう側には、外壁を守る以上のレーザー砲門が延々と続き、内部進軍のための通路確保に、ふたたび三千体以上のロボットを消失。アクバ一行が入り口付近にキャンプのような「基地」を作れるようになった段階では、残り兵士の個体数は三百を切っていた。

「ここまで防御が厳重に行われているとはな。シヤム。基地ハッキングの様子はどうか」

「？」とアクバが聞いた。シヤムはいまやアクバの秘書的存在になっていた。

「まだです。でも、隊長」とシヤムはアクバに意見を言おうとした。アクバはシヤムの

「でも」には慣れていた。この「でも」があるからこそ、彼とここまでたどり着けたのだ。

「なんだ？ 何か提案があるのか？」

「はい。ハッキングを並列演算に切り替えてはどうでしょう？」

「なんだ？」

「今回の進軍では、みな汎用の駆動体ボディを与えられています。脳共体のインターフェース部も同じなんです。だから、残り兵士の脳共体を並列につなげば、演算速度は大幅に上がります。ハッキング要員だけにまかせるより効率はずっと上がるはずですよ」

「なるほど。すぐにできるのか？」

「大丈夫です。我々ウイバはチーム力の再編成こそが、得意技ではないですか。特性を活かせるチャンスですよ」

「なるほど。ミীগたちにはできない相談だな」とアクバはシヤムの提案をとても気に入った。

兵士のうち半数の百五十の個体が脳共体のインターフェースを共有設定に変更し、「亀の子」こと、ヤランジ国境警備基地のネットワークインターフェースに接続を開始した。

ハッキングは、わずか二分四十二秒で、画期的な成果をあげた。二万桁、三千重のパスワードを軽々と打ち破り、施設内の配置図を入手できたのである。

「エラミット水晶がある、ヤランジ基地最上階のエネルギーコア集波台まで三階層。途中にあるレーザー砲門は、小型速射タイプが百四十二門です。三百個体いれば、なんとか、

突破出来る範囲です」とシヤムが報告をした。

それを聞いてアクバが「では突撃だ」と、声を出そうとしたその時、ハッキングをしていた百五十体のウイバ達が一斉に奇声をあげて、残りのウイバやシヤム達に襲いかかってきた。身の回りにいる、仲間のロボットの首をへし折り、腕をもぎとるなど破壊行動を取り始めた。

「逆ハッキングか！」とシヤムは叫んで、即座に狂ったロボット達に向かつて行った。

意味不明な言葉を発しながら、迫ってくるロボットを避けて、大きくジャンプする。そして、攻撃を仕掛けて来るロボット達を電磁ソードで倒しながら、基地ネットワーク侵入の、メインゲート役となっているロボットに近付いていった。逆ハッキングの操り情報が流れ込んでいる元を断たねばならなかった。

クインシー・サーティーツーという、ハッキング専門ロボの近くに、シヤムがたどり着くと同時にシヤムは電磁ソードで、クインシーの脳共体部分を破壊した。

狂ったロボットの反乱は収まったがすでに仲間同士の戦闘で、個体数は半分近くに減っていた。傷ついた兵士も多かった。

「なんとという事だ。エラミット水晶確保まで、後一步だと言うのに。しかし、地図も手に入った。一旦撤退して、増員を待って攻撃すれば確実にエラミット水晶は手に入る」とアクバは一旦撤退する事を意識し始めた。

「待ってください。撤退後、再突入がそう簡単にできるとは思いません」と、シヤムは反論した。

「この基地は自己修復機能を持っています。今回の我々の攻防もすべて中央管理脳共体が解析済みです。次の再突入時には、入口攻略は一からやり直しですよ。それこそ、大変な数の仲間を失います。ここまでできたチャンスを活かして一気にエラミット水晶を確保しましょう」

「しかし、この数で百四十門ものレーザー砲をくぐり抜ける事はできません。無駄死に出すだけだ」

アクバは、シヤムの前進の提案を却下した。

「でも、我々を迎え撃つレーザー砲は、RSS-500シリーズなんですよ」と、またシヤムの「でも」が出た。アクバも半分は、このシヤムの「でも」を期待していた面もあったかもしれないなかった。

「RSS-500シリーズだったらどうだと言うのかね」アクバは、慎重な隊長としての役割を優先して、シヤムの意見を確認した。

「RSS-500は標的を仕留めた後に、必ずターゲット消滅の確認動作を行います。その動作に○・35〇・44秒までの固定動作を伴うのです」

「だから？」

「砲門一つにつき、兵士を一体わざと破壊させて固定動作を誘発させるのです。そのスキがあれば、私の電磁ソードでレーザー砲門は充分に破壊可能です」

「馬鹿な。仲間の破壊を前提にミッションを完遂させるといえるのか。それはつまり、百四十の砲門に百四十の個体破壊を行うと言うことではないか！ それは、あまりに…」と、言いかけてアクバは次の言葉が出てこなかった。

本当は、「あまりにひどい」と言おうとしたのだが、ひどいというのは、ロボット個体

の問題だ。脳共体を失ったロボットは、それまでの記憶を失う。ミッションを遂行してきた目的意識もノウハウも、すべてが消えてしまうのだ。それはあまりにもムダであり、ロボット三原則の「できるだけ自分の身を守る」というルールにも反しすぎている。ウイバの長として部隊を束ねてきたアクバにはとても承伏しかねる決断だった。

しかし、我々ウイバ全体の、いや、ミーグもウイバもひつくるめたロボット全体が生き延びるといふ、大きな目的のためには、シヤムの提案こそが正当だと考えざるを得なかった。

「いや、良い方法なのかも知れん……。うむ。それでいこう」

アクバは珍しく十八秒も、そのアクアブルーの巨体を一切動かさずに熟考した後、シヤムの提案を受け入れた。

エラミット水晶のあるエネルギーコア集波台攻略のチームはすぐに編成された。逆ハッキングをかけられて身体機能はあっても心神喪失状態に近いもの、レーザーや駆動体に対する逆ハッキングの攻撃を受けて身体機能の劣ったものが集められ、進軍の先頭に立たされた。

身体機能に問題のない個体が、仲間をレーザーの射程内に投げ入れる。瞬間、自動追尾機能を持ったレーザー砲門がロボットを焼き尽くした。そして、間髪を入れず、シヤムが大きくジャンプをしてレーザーの銃身を根元から切り落とした。

ロボットを投げ入れる。焼き尽くされる。レーザーが切り落とされる。その連続だった。砲門が連続している場所では、シヤムはその身軽な動作で、壁から壁へと連続ジャンプして、レーザーの銃身を切り落とし続けた。

階層が上がり、エネルギー管理コアに近づくに連れ、レーザーに焼き尽くされるロボットは、どこに不調があるでもない、普通のウイバへと変わっていった。

彼らは、道を開くために、自ら、自身の身を捧げる殉教者のようなものだ。ロボット社会が生き残るために自分の個体の記憶が失われる事に同意していた。

ロボティアとの通信が絶たれた、この異国の地で、彼らの脳共体を失うと言うことは、彼らの「経験」のバックアップデータが存在しない、と言うことを現す。

次に彼らが目を覚ます時には、いまここで前進のために記憶を捨てた事すら、痕跡すらなく残っていない。全ては無だ。無、だけが彼らの前に存在していた。

また、一体、個体の記憶が消え、シヤムがレーザー砲の銃身を切り落とした。そして、エネルギーコア集波台へと続く、大きなハッチ前へと一行はたどり着いた。

「この向こうは、集波台だ。ハッチを開けろ！」とアクバは解錠を命じた。

先頭のロボットが天井のハッチから上上がり、壁を抜けて、青空の見える空間に出た。そこは、直径数百メートルはあるかという巨大なお椀の底部分だった。宇宙からやってくる、あらゆるエネルギーを集波する集波鏡だった。

そのパラボラアンテナのような集波鏡の中央にそびえ立つのは、高さ数十メートルの集波台。その頂上にこそ、目的のエラミット水晶はあるはずだ。

「エラミット水晶を確保する。接続ケーブルの動作を停止しろ」とアクバが命じると、いままです大きなうねり音を立ててエネルギー供給をしていたと見られる集波台の物音が止んだ。わずか十数体残ったウイバ兵士の中から、一体が塔を上り、エラミット水晶を接続機器から取り外して慎重に持ち運んできた。

そこにあつたのは、全ての波長のエネルギーを吸い込む絶対的漆黑、エラミット水晶だった。直径約二十センチ。これまでに確保した、どのエラミット水晶より大きい。

ミッシェンを達成した、というコンプリート信号が、アクバやシヤムをはじめ、全個体に共有された時だった。全天周をかこむ集波鏡の頂上部分から、小さなウィーンという音が聞こえた。

「盗難者の排除システムだ！ 全員避難せよ」と全ての事情を察知したアクバがコンプリート共有信号に乗せて退避命令を発信した。

全員が小さなハッチに向かおうとした時、シヤムはエラミット水晶を持っていた個体から、エラミット水晶を奪うと、その個体が携行していた避難用ロープ銃をも取り上げた。

「ハッチは罠です。上から逃げましょう」と言うが早いか、ロープ弾を集波鏡の鏡と空との境界線に打ち上げ、頂上部分にロープを撃ち込んだ。シヤムはそのまま、エラミット水晶を小脇に抱え、巻き上げ機能のついたロープ銃にぶら下がって一気に集波鏡の頂上部分に向かって滑り上がっていった。

「隊長、私につかまって！」とシヤムが言うが早いかアクバは自ら大きくジャンプして、シヤムの足首を握った。

一瞬の出来事だった。アクバとシヤムが、集波鏡の周縁部分に巻き上げられて行く間に、全天周部分から表れたレーザー砲二十四門が、残った十数体のウイバたちめがけて一斉射撃をした。アクバの残存兵士、全個体が塵となった。

ヤランジ国境基地の外へ、アクバとシヤムが降り立った時には、基地は自爆装置を起動させ、国家機密の漏洩を防ぐ破壊ミッシェンへと移行しだした。アクバとシヤムは一言も

しゃべらず、最大速歩に切り替えて全速力で基地から少しでも遠くへ逃げ延びようとした。

基地の爆破が終わった時、やっと2人は会話をはじめた。

「なんとかミッシェンは達成できたようだな」アクバがほっとしたように言う。しかしシヤムはそれには答えず、「そう簡単ではありませんよ」と異を唱えた。

「どういう事だね」とアクバはシヤムの真意をはかりかねて尋ねた。

「ここからは、エラミット水晶を抱えたまま、ロボッティアとの交信が可能な位置まで撤退するという重要なミッシェンが待っています」

「それがどうしたと言うのだね」とアクバはいぶかしげに尋ねた。

『『砂漠の雲』ですよ。あなたも私も往路では、股関節を食われずに済んだ。でも、ここからは、防護壁が一重の無防備な股関節で、『砂漠の雲』が待つヨンギンド砂漠120キロを走破しなければならぬのです』

アクバは、その絶望的な状況を、やっといま認識した。

「どうすればいいんだ？」とアクバが嘆いたと同時にシヤム声を発した。

「こうすればいいんですよ」

言うが早いのか、シヤムはアクバの体を胸のあたりから、電磁ソードでまっふたつに切り裂いた。

「な、何をする…」

アクバの質問を待っていたかのようにシヤムは答えた。

「隊長の肩関節を私の股関節に移植するんですよ。移植技術の手順は、あなたの巨大な予備メモリの中に保管されてましたよね？ 隊長なんですから」

確かにその通りだった。ウイバ兵の隊長は、できる限りの情報を持ち帰るために、部隊の重要情報を精選して体内にバックアップする仕組みになっていたのだ。アクバの胴体部分に仕込まれたコンプレス・メモリには小隊長クラスのウイバ、約1500体分の知識と経験の「要約」が詰まっていた。まさに「動く報告書」とも言うべき存在がウイバ兵の隊長、アクバの役割だったのだ。

「残念ながら、隊長の胴体までは持ち帰る事はできません。しかし、私がロボッティアに無事帰る事ができれば、この位置までなら救助隊を派遣することはできる。だから、あなたの肩関節を、私の股関節に移植しましょう。私なら、ロボッティアまで帰りきることができるでしょう」

そうか、私の体内メモリと、肩関節の必要性が分かっていたからこそ、ロープ銃で滑り上がって行く時、シャムは私を「救おう」としたのだな、と、やっとアクバは全てを理解した。

「確かにな。君ならたどり着くだろう。私もそう思うよ」

そう言うとアクバは、自分の体内にある軍医ナマンダの関節移植技術のダウンプット許可をシャムに与え、アクバ自身の解体ミッションをシャムにゆだねた。

シャムが移植手術を終え、ロボッティアへのエラミット水晶運搬と交信可能範囲までの撤退行動に出た後、アクバは砂漠の中で、首だけの姿で、自分の大柄なアイアンブルーのメモリボディをながめていた。ここからは、ひたすら、救助隊がやってくるのを待つだけだ。

アクバの正確な位置を知るために、全地球観測用「鳥ロボット」が、アクバの首と、メ

モリボディの上空に到達し、何度も繰り返し円弧を描いたのは、それから三年と四ヶ月後の事だった。

■第三章 百年の眠り

西暦4022年

百年ぶりのロボッティアの街並みは、ソルには少しハメをはずしているように見えた。かつて人間たちが休憩時間に集まっていたタリスマンド広場にも、靴磨き屋を模したメシテナンスウイバや、移動車によるハンバーガーショップ風に仕上げられたエネルギーピットなど、人間代に流行った個人商業ウイバが数多く見られた。

商業ウイバの営業は、ロボットを人間が個人所有していた時代の名残りだが、ショップスタッフ専用に設計されたロボットがいままた再活用されたのだろうか。

エネルギーの効率活用を行うにはムダに人間の文化が色濃く残っている商業ウイバが通常稼働しているのはおそらく数百年ぶりに違いない。

「エラミット水晶のエネルギー余剰が、こんな形で還元されるとは想定していなかったな」とソルは自分が立案した計画の結果に、妙に納得するしかなかった。

というのも、数日前、また百年ぶりに揺り起こされ、エドモンド佐官から投げかけられた「課題」が、このロボット社会の変容が原因とも言えるものだったからだ。

ソルはタリスマンド広場を横切り、広場に面する形で白くシンプルなデザインの間を開いている公立情報センター「ローク」に向かいながら、また百年を経て再起動したボディスタンドでのエドモンドとの会話を思い出していた。

「どうだね、ソル君。しばらくぶりの目覚めは」

百年前と、まったく同じ口調でエドモンド・オーツィは語りかけていた。

「どうしたというのですか。私がまた起こされるような出来事でも起きたということですか？」

「か？」

「起きた、というか、何が起きているのかわからない。ということだろうね」と、エドモンド佐官は少し変化球の答えを返した。

「どういうことですか？」

「歩きながら話そうか」とエドモンド佐官は珍しく、ソルとの個体間情報交換を望んだ。

「いいですよ」と、ソルはエンジニア・ウイバによる駆動体の完動チェックを受けた後、ミীগ専用高速エレベーターへは向かわず一般エレベーターから階上へと移動し、エレベーターの乗継階となるホールアースセンターの地上百階の廊下に出た。

「実は、エラミット水晶が手に入って以来……」とエドモンドは歩きながら話を始めた。

「ウイバ達の間で、活動生涯の延長依頼がとても増えているのだよ」と困ったような口調を選んでソルに伝えた。

「活動生涯期間の延長は検討しても良いのではないですか？ エラミット水晶があれば、かなりのエネルギーの余力が生まれるはずですよ。大きな問題にはならないでしょう」

「とは思いますが……」と言いながらエドモンドは小会議室のドアを開けようとした。

「小会議室ですか？」とソルは不思議に思っただけで確認する。

小会議室は、昔人間たちが、まだこのホールアースセンターにいたころに使われていた前世の遺物だ。世界をロボットだけが運営するようになってからは、ロボット間での情報やりとりのみが大切になり、無線ネットワーク環境すらなく、表情やボディランゲージのやりとりを重視する「人間」にしか役に立たない小会議室が使われることは、ほぼなかった。

「うむ。まずは接続環境のないところで、二人だけで話したいのだ」とエドモンドはあたりをうかがうようにしてソルを会議室に促した。なぜ二人きりで話す必要があるのか。ソルは不明なまま部屋へと入った。

エドモンドは小部屋で椅子に座ると、すぐに要件を切り出した。

「実は、今回君が再起動されたのは、『ヒムカ』の探索をすべきか否か？ という議題の検討ということになっている」

「ヒムカですか？ あの不可侵の迷路を？」

ソルは、その議題を聞いて、不自然なものを感じた。ヒムカは、活動期間を終えたロボットの記憶を集約し、次世代ロボットに活用するための施設であり、人間が生きていた時代からずっとロボットの侵入は禁じられていたからである。

人間が設定したタブーを破る。そのことを最も嫌う最高評議会が、タブーの中でも最重要と言える情報再整理センター『ヒムカ』への侵入を検討している。そのこと自体が異様な印象を受けたのだった。

「情報再整理センターは、軍事施設以上に、我々にとっては謎の施設ですよ」

ロボットはミীগドであれウイバであれ、定められた活動期間を過ぎれば、一部の優秀な個体をのぞいて、多くは脳共同体に納められたデータを情報再整理センターに送って、活動が停止される。

個々のロボットの体験した人生の記憶は、情報再整理センターで要約化作業を施された後、このホールアースセンターに転送されてくることになっているのだ。情報再整理センターがどこに設置されており、「再整理処理」がどのようなものであるかはロボットには

一切知らされてはいないのだ。分かっているのは、その施設の建造や運用ルールを創ったのはロボットを産み出した人間である、ということだけだった。

「その謎を探らねば、ウイバ達が何故、活動生涯の延長を願い出たのかわからないだろう、というのが最高評議会の結論であり、君を再起動した理由でもあるのだ」とエドモンドは端的に理由を説明した。

「しかし…。それはあくまで表向きの理由でな。それとは別の目的が君の再起動にはある」

「どういうことですか？」ソルは、エドモンドの真意を図りかねた。二人だけの接触にせよ、「表向きの理由」などという論理明白なロボットにあるまじき表現にせよ、すべてがあまりに異様だった。

「実は、ウイバ達の活動延長依頼を、十三佐官は非常に心配していてな」

「と言いますと」

「うむ。エラミット水晶が手に入ったとは言え、そのエネルギー総量には限界がある。ロボットは、体の更新さえすれば、ほぼ無限に生きる事ができるのだ。このままだと、データガベージを拒否して、いつまでも活動期間を延ばすウイバだらけになってしまい、またエネルギー不足になってしまうのではないかと怖れているのだ」

「確かにその可能性はないとは言えませんが、一般ウイバの活動期限は、最大五百年に定め、ロボット総数も全地球で最大十七億と定められているではないですか」

「だから、そこだよ。その自分たちで決めたルールを逸脱したいと考えているロボットが増えているのだ。」

「困りましたね。我々ロボット社会を存続させるためにルールは決められていますよ。だが、エラミット水晶があれば、かなり広範囲に生産効率も上がりますから、必要なら我々の活動期限をもう百年ほど延ばしてもいいし、ロボット総数も十七億には、まだ余裕があるのではないですか？ それに、あくまで私の試算ですが、いまのエラミット水晶の総数からすれば、最大総数を多少越えても問題はないはずですよ」

「違うのだよ。問題はそこではない。ルールを逸脱したいと考えているのは、我々十三佐官の方なのだ」

エドモンドの答えにソルは理解が追いつかなかった。

「どういう事ですか。十三佐官が何を逸脱しようとしているのです？」

「我々の中から、十三佐官だけは、活動期間を五百年以上にしようという意見が出ている。いや、ほぼ永遠にメンバーを固定化した制度にした方が良いという意見が出ているのだ」

「それはどういう理由で？ 私にはタギングがどんどん硬直化するだけでメリットはないように感じるのですが」

「いや、彼らの考え方では、その逆だ。活動期限の切れたウイバ達の情報は、整理されてこのホールアースセンターにまとめられる。エラミット水晶の入手とて、そのデータがあったからなし得た。それはより多くの情報を再整理し続けてきた十三佐官の存在があったからで、人類の絶滅以来統治に携わってきた十三佐官は未来永劫固定化した方が良いという結論を出したのだよ」

「それは良い判定を導かない」とソルは、つい、常々考えていた佐官たちへの評価を表明した。あの質の低いタギングでは、問題を抽出する精度が低すぎる。佐官が固定されたら、

ロボット社会の混乱を助長するだけではないか、とソルの仮説構築回路が告げていた。

「ソル君、反論の提出はまだ早いよ。私が問題にしているのは、佐官メンバーが固定されたその後にこそあるのだから」と、エドモンドはソルの意見を先読みするかのように話を続けた。ソルもその先読みを聞くしかなかった。

「佐官たちの意見を集約すると、ロボット社会を運営するためには、より多様な情報が必要ということになる。しかし、現場で活動しているウイバ達の貴重な経験や知識、技能は、ウイバ達が公的に活動を停止した後には、このセンターに集約されない。つまりウイバたちの活動停止がなければ、ホールアースセンターでの情報整理と収集は行われないうことなのだ。だから：」エドモンドは少し言いよどんで、改めてソルに告げた。

「十三佐官は、ウイバ達の活動期間そのものを大きく短縮したいと考えている。個々のウイバの活動期間を百年程度とし、駆動体の使用回数を増やそうとしているのだ。ボディを作る資源の再利用にも効果があると云ってね」

「え？」とソルは驚きの言葉を発するとともに、カチンという胸の奥にある危機管理回路のスイッチが入った音を聞いた。

「それはまるで、ウイバ個体の虐殺行為ではないですか。三原則に反する行為だ！」と、危機管理回路が開いたままの緊急モードでソルは叫んだ。活動期間の短縮とは、ロボットの命を短くすること。つまりは十三佐官の個体を守るためにウイバの命を抹殺してしまうことにしかならない。ソルはそう考えた。

「ソル君。三原則に反する行為と言うが、三原則では人間とロボット間での規定はあっても、ロボット間での規定はないのだよ。ロボット社会そのものをいかに存続させるか？」

という命題の前には、彼らの意見も無視はできないんだ」とエドモンドは落ち着いた口調で答えた。

「それに、まだ、私は本当に大事な話をしていない。危機管理回路を開くのは、この話を聞いてからにしてくれないか」とエドモンドはソルに釘を刺した。

「君は眠りが長かった分、いまだに論理回路の大筋がシンプルなままなようだ。人間にたとえて言うなら『若い』ということか。私が君に伝えたかったのは、君が何故起こされたか？ ということなのだよ。君自身への注意を勧告したかったのだ」

「どうしたのですか？」

「君は『破壊の解決者』と呼ばれているのだ。それがすべてだ。つまり」とエドモンドは一呼吸置き、

「彼ら十三佐官は、君を再起動することで、ウイバ達の”大量破壊行動計画”自体を望んでおるようなのだよ」

そんなばかな、とソルは思ったが声にならなかった。

「君がウイバ大量破壊計画を提出すれば、十三佐官にはたくさん現場情報が手に入るからね。君の無茶な計画は、彼らにとっても『おいしい情報』をもたらず、ということが『水晶狩り』のおかげでわかってしまったんだよ。いや、それどころか、」と、言ったところでエドモンドは、また一呼吸おいて、

「いままでの君の再稼働ですら、彼ら自身、君にウイバを大量破壊させるようなミッションを持ちかけようとしていたのかもしれないのだよ。わかるかね？ ゾウも水晶もウイバを殺す事が目的だったのかも知れんのだ。君はまんまと、佐官たちの思惑にはめられたとは声を発した。

「うわけだ」

エドモンドの仮説は、ソルには想定外の指摘だった。新たなタグを作る必要をソルは感じ、タギング課題用のファイルボックスにタスクを生成した。

ソルの返事がないことを想定していたかのように、エドモンドは話を続けた。

「とにかく、いまここで話したことは他の佐官たちには漏らすな。会議の前にそれだけ伝えておきたかったのだ。最終判断は君にまかせる。それと」とエドモンドは一呼吸おいて、ソルの反応をじっと見た。ソルはまだタグファイル生成過程だったがかまわずエドモンドは声を発した。

「それと、君が指摘していたエンジンア・ウイバの七番だが…」

ソルは、「んん」と、タギングタスク処理からの復帰で声を出す操作が少し変になったが、「あの挙動のおかしかったウイバですね」とやっとな反応することができた。

「うむ。あの個体を精密検査してみたのだが、特段おかしなところはなかったのだ。ただ、ホールアースセンター内で似たような挙動を行う個体がないか調べてみたところ、約三%の個体になんらかのタギングフックがあった」

「三%。多いですね。どうしてそんなことが」

「わからん。が、君があの時残してくれたタギングファイルでわかるのは、ここまでだ。この事実もウイバの活動期間短縮論の根拠になっているのだ。とにかく会議では佐官たちには慎重に対応してくれよ」とエドモンドは念を押すように言った。

結局、佐官たちとの会議では、ソルはエドモンドの指示どおり、当たり障りのない反応を示し、情報不足を理由に対策の提案を一週間ほど先延ばしにした。

実際、何を考えるにしても、あまりに基礎情報が不足していたのだ。ウイバたちの活動延長希望の増加、不審タギングを発生するウイバ。

何かの答えが見つかるかも知れないと思っただけで、ソルは、ロボット個体の情報が検索できる情報センター「ローク」へと足を伸ばしたのだった。

いや、何も分からなくてもいい。せめて、佐官たちの思惑に乗らず、ヒムカへの侵攻計画を立てない言い訳さえできれば、いたずらにウイバの「命」を失わせないで済む。先延ばしも一つの方策なのだ。

ソルは、「ローク」の部屋中が真っ白な情報閲覧室で、「情報取得寝台」に横たわっていた。ロークはもともと、ロボットメンテナンスのための施設だった。寝台が情報端末になっっているのは、その名残だ。もともと、ロークは、ロボットのための保健所のように活用されてきた。活動期間の停止処置や、その届け出もここで行われる。だから、あの「水晶狩り」と呼ばれた軍事侵攻後に、活動期間延長を願い出たロボット個体の情報も、ここに納められているのだ。

「活動延長願いを出したウイバの脳共体で異常のあるものは、約四%ほどですが、特に問題のあるものは見当たりませんわ」とロークの情報窓口係のヒロタ・ビーティフォーの姿が、空間にホログラムで映し出された。

人間代に設計されたロボットらしく、女性を模したシルエットと声だ。

「やはりそうか」とソルは思った。脳共体に問題があるわけではない。行動や思考プロセスに問題があるのだ。だから私のタギングにしか引つかからないのだ。

「ビーティ、済まないが山之上工業YK155617のデータはあるかね」とソルは、

あの異常タギングフックを見せていたメンテナンススイバの型番を告げた。

「すぐ出ます」とビーティがソルの無線コネクタにデータを送り込んだ。

左の指に有機ワイヤーのわずかな傷があったが、もともとメンテナンスチームのロボットだけあって体調は万全。とりたてて問題らしき問題もなかった。

「ビーティすまないが、もう一度『ロボットの体構造』をオープンエリアに展開してくれないか」とソルはふたたびビーティに声をかけた。

「了解」と言っただけで、人間代に人間の手によって書かれたロボット工学の聖典と呼ばれる廣田博士の基礎構造工学書を、ソルの内部広視界エリアに全ページ展開して送った。ロボットの保健所でもあるロークにおいては「ロボットの体構造」は基礎資料だ。まず、これをじっくり読まなければ。

全ページ展開された、この名著を、何度読み返しても、ロボット三原則は脳共体という汎用有機処理ブロック自身に埋め込まれているという事以外はわからなかった。どうしてあのメンテナンススイバのような人間特有のタギング行動が生まれるのか？ 謎は解けなかった。

ロボットは、ユークンド製造工場で、脳共体に個体情報が書き込まれ、この社会に送り込まれる。そして個体の経験した情報はデータ化されてドースワンドにある情報再整理センター、「ヒムカ」で集約される。

それ以上の事はどうも秘匿事項として非公開になっているようなのだ。

すべては人間が考え、決め、ルールが構築されていた。そしてそれはロボットが知る必要の無いこととして定義されている。

考えられる可能性は、ロボットの活動期間中、何らかの体験が行動を異常化させているのではないのか？ という程度の推測だけだ。せめてロボット活動終了時の記憶の要約が行われる前に、情報再整理センター「ヒムカ」での生の個体記憶にアクセスできれば、何かわかるかも知れないのだが、ヒムカもまた国際的な重要機密施設として、軍事施設なみの厳戒態勢が人間代から稼働し続けている。

佐官たちの思惑に乗るわけではなかったが、確かにロボット社会を維持していくためには、多くの犠牲を払ってでもドースワンドにあるヒムカに向けて、ウイバを派遣しなければならぬのかもしれない。

仕方なく、ソルはホールアースセンター認証官としてのIDを使って、ヒムカ侵攻の計画立案のための情報検索をすることにした。

特にソルが気になったのは、「水晶狩り」での実質的な個体損失率だった。もし十三佐官がウイバを虐殺する事をも含めてソル自身に虐殺計画を立てさせたとするなら、果たして、その失われた個体はどの程度の数だったのか？

その情報の把握には、ホールアースセンターでの戦績情報と、ロークでの部隊ごとの個体再生回数や修理データのマッチングが必要だった。ホールアースセンターでは、破壊された「個体」のハードの数は分かるのだが、メモリだけが残り再生されてふたたび戦地に送り出された個体の数までは分からなかったのだ。

これも、わざわざロボットの保健センターでもあるロークまで足を伸ばした理由のひとつだった。

ソルはロークとホールアースセンターの両方の情報をダウンプットして、解凍された個体別データごとに、駆動体喪失によるメモリ再生率やミッション達成率などを自動マッチングしたグラフにするようにビーティーに依頼した。

「もしヒムカに部隊を派遣するならば、できるだけ成功率の高い部隊を編成する必要がある」とソルは考えていた。せめて、その方策を練っておくことが、十三佐官の「虐殺策」への対抗策になるはずだからだ。

結果は十九分後に、ソルの内的映像空間に一齐に立体グラフとして展開された。漆黒の宇宙に突然何千ものグラフの華が開いたようだった。

大隊、中・小隊あわせて約八百の部隊ごとのデータが、それにぶら下がる何万もの個体データや、達成率などの細目グラフとともにヒモづけられ、大輪の花火のようにデータ空間に浮かんでいた。

すべてのデータは、自由なキーワードで色分け分類、並べ替えが瞬時に行え、クロス集計、多次元解析などもソルが意識するだけで即座に反映された。

ソルはその立体グラフ空間を自由に行き来できる「視座」としてデータ空間に漂っていた。これが、会計ロボットとして設計された、ソルの情報把握能力でもあった。

そのにぎやかなグラフの宇宙空間を高速に移動し、並べ替え、あるいは一気に全体を俯瞰していくうち、ソルは異様なグラフの突出をいくつも発見した。

「なんだ？ これは」と、細目データを次々に開いていく。突出したグラフは、特定の個体を指し示していた。ある個体だけが、他の個体と比較して、何倍も出陣回数が多く、しかもミッションの達成率も異様に高かったのだ。

「個体名は…。シャミュレット-WB-4005-01だ」

あまりの突出率にソルは興味を持ち、個体データを詳しく調べた。

元港湾作業ロボット。水晶狩りの歩兵として徴用された後数回のミッションに参加。「亀の子」ことヤランジ国境攻略時には隊長代理として帰国し、その後、アクバ隊の副隊長職に昇格。

ミッション達成率の高さから隊長へと昇格して、水晶狩り計画の後半では、部隊長として指揮に就いていた。部隊長としての作戦もすべて成功。危険なミッションほどに自ら先陣を切り、必ず目的を果たして帰ってくることから「必着のシヤム」という通称もあると記載されていた。

そして過去に一度として記憶の再生、つまり肉体を失ってバックアップからの蘇生を受けていないのだ。理由は分からないが、つねにミッションを達成する能力が高いということだけは立証されていた。

「この個体に大隊の指揮を執らせるか？」と、大胆な案を考えようとした時だった。

ソルは、不審な電波を感じ取った。

微弱だが、通信は可能な強度。そして、公的機関の使用波長リストにはないものだった。

「盗聴？」

なぜかソルのタギングデータベースから、そんなキーワードが候補としてソルの視野に表示される。盗聴？ 全てが公にされてしまうロボットの世界で？ ありえない。

とは思ったが、ソルは念のため内的映像空間を閉じ、情報取得寝台の上に戻った。

「ありがとう。いろいろ助かったよ」と、ソルはビーティーに声をかけると、いま手に入れたシヤムのデータを自分のメモリ内にダウンロードしてすぐ、ロークを出る事にした。

もし本当に盗聴なら、誰が？ 何のために？ なぜ隠れて行動する必要があるのだ？
あまりにおかしい。

ロークの清潔で、真っ白な光りだけがあふれている廊下をソルは少し足早に抜け、左右に柱のある、大きな玄関にたどりつく。

外に出れば、ロボット社会の首都、ロボッティアの街並みが広がっていた。

街を歩いているのは、この都市を支える多種多様なウイバ達だった。人間の代わりに「消費」と「労働」を行っている。人間達が産み出したシステムを活用するには、人間の代わりにロボットが粛々と行うことも効率的なのだ。いまここに本物の人間がいたら、この機械人形が人間の真似ばかりしている社会をどんな気持ちで見えるだろうか？
それは人間ではないソルには計り知れない事だった。

そして、不思議な事に、さっきまでわずかに受信できていた妙な電波は、この多くのロボットが行き交うタリスマンド広場に出た途端に消えていた。いったいあれは何だったのか？

ソルはホールアースセンターに向かうつもりで歩き始めたが、ふたたび視界にタギング候補のキーワードが表れた。

「尾行」

なんだって？ 誰が？

あわててふり返るが、そこには人間たちを真似たロボットたちの雑踏があるだけだった。ソルは自分の視界用カメラを望遠に切替えて、個体ごとの体動作スキャンをはじめた。一分もかからずに、見たこともないロボットにいくつものタグ情報が貼り付けられた。

『隠蔽』『隠匿』『潜入』『欺瞞』。

まさか！ このキーワードは、あのメンテナンススイバとまったく同じではないか？ あわてて望遠を超望遠にする。そのロボットには、左の指に有機ワイヤーのわずかな傷があった。

山之上工業YK155617だ。まちがいない。ソルはゆっくりと「7番」に近づいていった。だが、7番もそれに気付いたようだった。急にふり返るとロークの脇にある小道へ入り込み逃亡をはじめた。

「まずい。逃げられる」

そう思ったソルは、緊急連絡回線を開いてビーティーに連絡を取った。

「なんでしよう？」

「異常ロボットだ。すぐに救急修理車を！ 運転は私がする」

「わかりました」とビーティーの返事が帰ったと同時にロークの壁が開き、大型の修理車が路上に姿を現す。逃げようとしていた7番のちょうど目の前をふさぐ形になった。

7番が一瞬ひるんだタイムラグで、ソルはなんとか追いつく事ができた。

「どういふことだ、YK155617。何故尾行などという人間のような真似をする？」

いや、それより君はなぜ、顔とボディを変更して変装することが出来たのだ？ その理由を聞かせてもらおうか」

7番を追い込む事に成功したソルは、歩みを緩めて7番に近づき、ゆっくりと、しかし、立て続けに質問を重ねた。

ふり返った7番は、もう逃げられないと理解したのか、ソルに真正面から向き合おうと、

「その質問には答えられない」と一言発したかと思うと、白い閃光を放った。

轟音。

7番は体ごと爆発した。

突然の爆風にソルは5mほど宙を舞い、ロークに隣接するオフィスの二階のベランダに腰からたたきつけられた。

おそらく、この異常振動の干渉補正のために、数時間、ジャイロセンサの数値は、狂ったままになるだろう。冷静に自分の体の状況を把握しながら、ソルの体は、ゆっくりと地面の上に落ちた。7番のいたあたりを見ると爆風で黒く焼けこげがあり、7番の姿は確認できないほどバラバラになっていた。

ジャイロセンサの異常で上下左右、近距離・長距離の感覚があいまいだった。爆心地が5kmほど先に感じられるのに、7番のバラバラになった部品は、そのメーカーの品番まで、手のひらに載っているかのように認識できてしまう。

異常事態に対応して、ソルのタギングデータベースが緊急解析をはじめ、爆心地のあたりにキーワードを表示した。

「自爆」と。

そのタギングワードを見たときに、ソルは事態のあまりの異常性に気付いてしまった。「自爆だ。ありえない。ありえない。ありえない。ありえない……」

ソルは方向感覚が狂ってしまったせいなのか、それとも事態の異常性に現実認識すらできなくなったのかも判断できないほど、ただ混乱していた。

脳共体に焼き付けられているロボット三原則の第三条をいまいちど復唱してみる。

「第三条 ロボットは、前掲第一条および第二条に反するおそれのないかぎり、自己をまもらなければならない」

「自己をまもらなければならない！」とソルは天も地も把握できない酩酊にも似た空間感覚の中で、叫んでいた。

そう、自己を守らねばならないと、もつとも基本的な部品である脳共同体に書き込まれている限り、ロボット自身がこの第三条を破ることは天地が入れ替わろうとも、不可能なのだ。

だが、この「7番」は、それをやってのけた。

この三条ルールを越えられるのは、私の侵攻計画や、十三佐官の決定があった時のみ。ロボット社会全体を活かすために、個体を犠牲にする時だけだ。

その理由以外で自殺など根本的にできるはずがないのだ！ いったいどういう訳なのだ？

いくつかの仮説をソルは構築しようとしたが、それよりもっと大事なことを決定しなければならぬ事に気付いた。

情報不足。

そうだ。情報不足なのだ。我々ミীগにも、まだ分からない未知の情報がある。それを知らねば、この不合理な出来事を解決できるはずがない。

この瞬間、ソルは、あの必着のシヤムを大隊長に据えたドースワンド・ヒムカ侵攻を決定していた。

■第四章 破滅行

西暦4052年

また、灼熱の太陽だ、とシヤムは思った。スワンナ海峽の岬で、これから向かわなければならぬドースワンド諸島を見ながら、あまりの直射日光に、シヤムはヨンギンド砂漠での「雲」のやっかいを思い出していた。ロボットティアのお偉いさんたちは、現場での想定外の「障壁」のことなど何も知らないのだろうな、と余計な考えをめぐらせていた。

そんな事を考えようが考えなからうが、やらなくてはならないのは、この私なのだ。

シヤムの上司だったアクバフォーティオーはすでに、使用年限の三百年が過ぎ、スクラップ扱いとなってこの世には存在しなかった。そして、いまはシヤム自身が十二万五千の大軍を率いる大隊長なのだった。

アクバの実直なキャラクターを思い出しながら、いまは自分の体となったアイアンブルのメモリボディをシヤムはひとなでした。アクバが寿命を終えるときにこのボディを譲り受けた。アクバの大柄な胴体に、シヤムの小さなクロスアイの頭部が載っている。

アンバランスな体になったが、シヤムはそれでもよかった。一体でも多くの個体情報を持ち帰ってやりたいという思いがシヤムにはあり、アクバの体はその意味で魅力的だったのだ。

都市建設管理ロボットだったアクバだからこそその大容量メモリだ。何百、何十ものビル建設と、その建設に従事するロボットすべての作業工程情報が収められる仕様が、この大規模な侵攻計画には最適だった。

これだけの大部隊がいつせいに作戦を実行するのは初めての事だ。軍事行動へのロボット使用禁止条約が全世界で批准されて以来、ロボットはつねに戦争とは切り離された場所にいた。戦闘専用の個体も存在しない。そんないわば素人集団が何万もの部隊として、行動するはじめての出来事だった。シヤムは、今回は汎用ボディを使うのではなく、個別の経歴を活かせるようオリジナルの専用ボディで進軍するよう全軍に伝えていた。

キヤタピラの脚部を持つロボットや、ウインチを備えたロボット、体内に車輪を持ち、いざという時には駆動カートになるようなロボットもいた。岩盤を破壊する超振動アームを備えたロボットもあれば、ワイヤーカッターの腕を持つロボットもいた。人間を乗せて移動できるように、体の中に人間用の座席を備えた大型ロボもいたし、人間が入れない場所の観察をするための小型の暗視カメラロボもいた。その多くは建設用ロボットであったり、工場での下働きのロボットであったり、つねに人間社会を支えるために開発された

ものだった。そういう個々の特殊技能が多様に揃っていれば、何が起きるか分からないこのミッションの達成率が高まるに違いないと、シヤムは考えていたのだ。

「シヤム大隊長、準備は完了しています」と、細身のロボットからの無線報告イメージがシヤムの脳共体スクリーンに映し出された。電波状況が悪くかなりのノイズが乗った映像だった。

報告してきたのは、「水晶狩り」で「砂漠の雲」に股関節を食い破られたグインドだった。彼の記憶もまた、アクバのメモリボディの中に保管されていたものだ。グインドの姿が映し出された横にはもう一つのスクリーンがあり、もう一体のロボットが映し出されている。砂漠のミッションでの三人一組のチーム。そのもう一人の仲間、ヨールレルだった。シヤムは三体で何度もチームを組んだ、この仲間との記憶も大切にしていた。今度のミッションもこの二人となら緊密に連絡を取りやすいはずだ。

「こちら準備は整っています」とヨールレルもシヤムに伝える。シヤムは静かにうなずき、クロス型のカメラレール上の青い単眼を光らせて、全兵士ロボの脳共体につながれた地域無線システムをオンにした。

「全兵士のみなさん。私の見る風景がドースワンドです。どんなトラップが仕掛けられているかは未知数。心してミッションを達成してください」とシヤムは、作戦開始前のメッセージを全ロボットに送る。メモリボディの熱暴走遅延を防ぐためにまとった、シヤムのマントが、塩気を含んだ風にひるがえった。

ロボット記憶処理施設ヒムカは、ドースワンド諸島の中の最大島コモノ島に存在する。ヒムカでのロボットの記憶の要約は、膨大な個人情報集積の要約であり、人間はまだ

この星にいた時から嚴重な管理の下、作業が行われていた。それゆえ、ドースワンド諸島一帯はコモナ島を中心としてロボット社会に対しては通信不能状態になっている。ヒムカで何が行われ、どんな防壁が施されているかも、ロボットであるシヤム達にはうかがい知ることができなかつた。

これまでの経験から空からの侵入はレーザー砲での迎撃が確實なので、シヤム達は海から、それもカヌーによる手漕ぎでの上陸を計画していた。

大きな港湾は避け、出来るだけ小さな部隊を、気付かれないように数多く上陸させる。何百もの部隊を、複数の浜辺から一気に入島させて、互いに連絡を取り、島全体の情報を共有しながら、着実に侵攻し、ヒムカに達する計画だった。島全体に通信の妨害電波は流されているが、ごく近距離でのスーパーマイク波による地域通信は可能はずだ。近距離用の小容量通信の電波なら、妨害システムにも引っかけにくい。

これなら、たとえ想定外の侵入者排除システムが作動しても、相互に連絡を取り合つて、リアルタイムに対処法を立案しながら対抗できるはずだ。

「ヨールルは東周りで、私は西周りでコモナを攻めます。グインドは正面突破をお願いします」とシヤムは指示を出した。コモナ島は総面積千八百九十九平方キロメートル。人間の統治単位で考えても、数百万人規模の都市が成立してもおかしくない広さだった。

シヤム達は小さな部隊を島全体に配置し、微弱電波で地域通信を細かく繋いで島全体を覆い、全体ネットワーキングが行えるシステムを組み上げていた。

いくつかの部隊が壊滅されても、他の部隊との連絡網が生きていれば相互の連絡は可能であり部隊が一体として動く事ができる。とにかく生き残りを最優先した布陣であった。

「では出発です」

シヤムの合図とともに、スワナ海峡付近に潜んでいた十二万五千のロボットたちが静かに海峡へカヌーを押し出した。ありとあらゆる種類・姿かたちのロボットたちが、そのバラエティ豊かなデザインの腕々に權を持ち、波しぶきに櫓を差していた。機械としての正確な動きがカヌーの速度を安定的に保つ。太陽はまだ灼熱のままだ。ロボットだから、汗はかかない。カヌーは波を超え、音楽のように進んでいった。

異変は、全部隊十二万五千の兵が、上陸し終えた、その瞬間にやってきた。真つ先に異変に気付いたのは先行して上陸し、ジャングル内指令室の設営を行っていたシヤム自身だった。少し離れた場所から、異様な轟音と地響き、そして動物のものと想われる咆哮が聞こえてきた。

まさに大地を震わす轟きとどろだった。最初は何が起つたのか、どのロボットにも理解できていなかった。そして、何が起きているのかを理解した時には、ほとんどのロボットがこなごなに破壊された後だった。巨大な木々がしなびて、見たこともない大きな柱のような物体が木立の間から差し込まれ、その物体に、ただ押しつぶされたのだ。

ロボットを破壊したのは、想像を超える巨大な生物の足だった。その足は、多種多様な形をしていた。マンモスのように体毛を備えたゾウのような足もあれば、ウマやキリンの足のようなすらりとした、少し小ぶりの足もあった。

もしロボット達に彼ら巨大生物の姿を観察する余裕があれば、マンモスや巨大ウマ、巨大キリンの他にも、ゾウとサイのあいの子のように見える生物や、サイのようにツノを持ったトラのような生物がいる事がわかつたかも知れない。

それら多様な生物すべてに共通する特徴は、巨大、という事だった。マンモスタイプ一体の足の裏だけでゆうにロボット二・三体を踏み殺すことができた。小ぶりのウマゾウ・キリンゾウとでもいうべき種族の蹄ですら、直径は二メートルに近かった。

すべてが見上げるほどに巨大なサイズであり、それらの一群がうつそうとしたジャングから現れた時、ロボットたちは自分が小人になったように感じた。どの生き物も数階から十数階建ての小さなビル並の高さがあったのだ。

中には、機敏に生物だと気付いて、反撃しようとするロボットもいた。しかし、ロボットが持っている武器はといえば、マシンガンと火炎放射器、小型のロケットランチャー程度。その程度の武器では何百と群れをなした巨大生物群を押しとどめることはできなかった。

巨大生物たちの猛攻は、まさに狂ったように苛烈であった。何がどうあっても、ロボットの存在だけは許さない、根絶やしにしてやる、という恨みがこもっているかのような激しさだった。

シヤムは、目の前で部下のロボットたちに、避難するように指示を出そうとしたが、気付いた時には四方を巨大な生物たちにとりかこまれていた。あわてて手近な巨大生物の足の間へと転がりこみ、わずかに安全な状態を確保すると、近くの部隊に応援を頼むためにスーパージェット波を開いた。

しかし、応援を頼むどころではなかった。脳共体内スクリーンに映し出された全軍の状況を示す三百数十のサムネイル画像は、そのほとんどが砂嵐のような交信不能状態だった。スーパージェット波は、各個体のロボットの脳共体に直接交信ユニットが埋め込まれており、

各部隊約四百体のうち一体でも生存者がいれば、主要画像が転送される仕組みになっている。交信がホワイトアウトしている、ということは、つまり生存者が皆無だということを表す。

大殺戮。

そう呼ぶしかない巨大規模での破壊行動だった。コモナ島周縁地域に配置された三百数十のロボット部隊を、一瞬で失ってしまったのだ。

おそらく、もう十二万の兵士の駆動体は諦めるしかないだろう。せめて、このコモナ島にいる巨大生物の事だけでもロボットティアに報告しなければ、この侵攻の意味がなくなってしまう。

シヤムは巨大キリンの足下を抜け、そのシッポにつかまって、キリンの背中に乗り、そこを踏み台にして、もっとも大きなゾウの背中に乗りかえ、そこからジャングルの木々に飛び移って、身をひそめようとした。

身をひそめようとしたのだが、しかし、最初のキリンのしっぽをつかまえるところで、手を滑らしてしまった。

アクバのメモリボディが邪魔をしたのだ。体格が大きくなった分、跳躍力の調整には、ずいぶん時間を割いたのだが、それでも実戦で通用するほどには、体はこなれていなかった。

シヤムの体は、マントにくるまれるように転がり、巨大生物たちにとりかこまれて、身をすくませていたロボットの一群の中に到れ落ちてしまった。

倒れたシヤムを見て、ゾウサイがすばやく踏みつぶそうとした。その瞬間、シヤムは近

くの兵士ロボットの足を引いて倒し、巨大ゾウサイの足の下にほおりこんで身替りにした。「なんとか生き残らねばならない」

それだけがいまのシヤムの使命だった。立ちあがるスキさえ与えてくれない巨大動物どもの猛攻に、次々に仲間の体を犠牲にして、身を守るのが関の山だった。

近くに木の上にもで伸びた蔦を見つければ、シヤムはそれを伝って木立ちの中に隠れこもうとした。最適位置まで移動し、蔦をつかもうとしたその瞬間、すぐ横にいたゾウサイに思惑を見抜かれ、シヤムはいきなり腰から下をを踏みつぶされてしまった。青い胴体も半分はない。ただ、コンプレスメモリ自体は無事なようだ。しかし、もう歩くこともできない。身動きのできなくなったシヤムを狙って、群れの中では小柄だが、妙に頭だけは良さそうなのヨイドラドゾウが数頭、近づいて来た。

頭部を粉々にしない限りロボットは死ぬ事はないと知っているようだった。シヤムの腕を、その器用で長い鼻でつかむと頭部を手近な岩に叩きつけて破壊しようと、シヤムの体を大きくふりかざした。

シヤムは身の危険を察知し、体に残されたエネルギーの大半を高圧電流に変換して、右腕にある、電磁ソールド用コネクタに放った。

ヨイドラドゾウはその強烈な衝撃に半身になったシヤムの体を放した。

シヤムの体は宙を舞い、木の幹にドスつと低い音を立てて一度ぶつかり、そのまま深い峡谷へと落下していった。シヤムのマントは木にひっかかって剥げ落ち、シヤムは上半身だけの姿で川に着水し、下流へと流されていった。

なんとという惨敗であろうか。侵攻命令を出して三時間十二分。部下のすべてを失い、

自分自身も身動きすらできない体になって川を漂っているだけなのだ。大切にしていたメモロボディにも何の情報も入っていない。ただ、重く動きを制限するだけだ。

放電でエネルギーの大半を失い、自分の命すら、もう長くは持たせられない。ただ、メモロボディに内蔵されている超充電物質ミマンサムのおかげで、かろうじて自分のメインコンシヤス電源だけは切れずに済んでいた。この電源が切れれば「意識」を失う。それはロボットの死を意味している。

「マントを失くしたのは痛いな」とシヤムは思う。あのマントには万一の事を考えてエラミット水晶の繊維を織りこんであつたのだ。マントから充電できれば、問題はなかったのだが。

川を下るうちに、自分の他にも川に流されているウイバの「死骸」があることに気付いた。水上を這うように死骸に近づき、四肢や胴体部分に入っている小型バッテリーを引きずり出しては自分のミマンサム電池に充電していく。

誰かの壊れた足を、自分の体に移植できないかと調べてみたが、どうみても移植のしようがない。あまりに規格が違うのだ。これなら、もう少し汎用ロボディの兵士を増やしておけばよかつたと思つたが、もう後の祭りだ。

シヤムは、漂っていた何体かのロボットの死骸の設計を注意深く調べて、その中にいくつもの回生モーターが入っているのを見つけた。ロボットの動作の反動エネルギーを電力に変えて、エネルギー効率を高める部品だ。シヤムは川の流れを計測してゴミの流れ着きやすい沢だまりを解析し、そこに死骸の腕や足を何本かかかえて這い上がった。

死骸の四肢から回生モーターを取り出すと指や腕の装甲など、余った部品で羽根車を作

って回生モーターにつなぎ、川の流れて発電できる仕組みを作った。それから、無接点電源コネクタのコードナンバーを調べて、回生モーターと自分のミマンサム電池と同調させる。

これで微弱だが、発生した電力を自分の体内に取り込むことができる。同調を確認した後はコンシヤス電源のみを残して自分の全センサを切り、わずかでも電力を使わないようにして充電を待った。

二週間のスパンで定期的に目覚めるように設定しておいたのだが、その間にまた何体かの「死骸」が沢だまりに流れ着いていた。自分の足に使える部品はないかと探すが、なかなか見つからない。ただ回生モーターはたいい見つかったので、同じように自分の体と同調するようにセッティングした。中には、エラミット水晶ほどの高効率ではないが、宙波エネルギーを電力に変える充電装甲を備えているロボットの死骸もあったので、それも自分のボディにつないだ。

数か月を経て、回生モーターは三百個、充電装甲の宙波発電システムが十二個セッティングできた。これなら、かなりの電力が稼げそうだ。そう判断したシヤムは、定期的に目覚める事はやめ、ミマンサムにフル充電されるまで、一気に「眠る」ことにした。コンシヤス電源ですらスタンバイ状態の電力最小活用モードにして、それ以外の駆動部・センサ類をすべて停止させた。

視覚情報が途絶え、何も見えなくなる。音も聞こえなければ、両腕を動かすこともできない。触覚センサも切られているから、腕があるのかわからないのかもわからない。ただ意識だけの存在になって、シヤムはフル充電を待った。

外界からのどんな刺激もなかったので、シヤムには手持ちの記憶を繰り返し確認するくらいしかすることがなかった。結局、昔、自分が港湾ロボットとして海を渡った時の情報を再生することが増えた。貨物船のさまざまなサイズのコンテナを、どう詰めこめば、同じスペースにより多くの荷物を入れることができるのかをコンテナひとつひとつを実測し、位置を入れかえて積み上げるのが、シヤムの本来業務だった。十字に動くクロスアイは、荷物の位置情報を確認するためのものだ。小柄な体はコンテナ間を飛び回るのに最適化されており、跳躍力と荷物を持ち上げる力が強化されている。シヤムはそのまま船の中に乗り込み、次の港でも最大限に積載できるコンテナ組みをする。あの時も、港と港を移動する間は電源を最小に抑えていて、その記憶がいまの状況と似ていたから、情報の再生が行われてしまうのかもしれない。

エネルギーが設定してあった数値を越え、ふたたび全センサーが再起動するまで、十二年と四か月がたっていた。目が覚めると、シヤム自身は、川底近く、かなり深い位置で泥の中に埋まっており、岸に這い上がってみると、岸辺には、かなりのロボット部品が打ち上げられていた。

流れついた部品を調べてみると、相互に組み合わせ可能な部品がけっこう多く集まっていた。それらを集めて、信号系や電装系の微調整をすると、かなり実用的な動く体を組みあげられた。

アクバのメモリボディは残念ながら捨てることにして、ミマンサム電池だけを、つぎはぎだらけの新しい体に移植した。比較的小型の部品を使ったので、それなりにキビキビ動く体に調整できた。

シヤムは、巨大生物たちに見つかからないように、沢からジャングルの中を通って、小高い丘を登って行った。ここからもっとも近い、第四十二部隊のカヌー置き場が丘の向こうの浜辺にあるはずだ。

しかし、丘の上に登り切ったシヤムを待っていたのは、もっとも出会いたくない相手、あのゾウサイだった。またも待ち伏せされていたのかもしれない。ゾウサイは、シヤムを見つけると猛スピードで突進してきて、あまりに巨大なツノでシヤムの体を貫いた。

川の中で十二年と九か月待ち続けてきた努力は、ほんの二時間二十五分でまったくの無駄になってしまった。それなりに動きやすいボディも、いまはこなごなに砕け散り形すらない。いまやシヤムの体は、クロスアイの頭部と、それに連なる脊椎の役割を担う中央信号ケーブル、そして、そのケーブルとかがろうじてつながっている右腕だけになってしまった。むき出しの、壊れた電気製品の残骸のような姿のまま、丘の斜面を猛烈な勢いで転がり落ちていく。中央信号ケーブルも転がるたびに何線かは断線していったはずだ。

意識だけはあった。しかし、もう動くのは片腕だけだ。ミマンサム電池も失い、コンシヤス電源ももう切れる。本当に絶対絶命になってしまった。と、その時、シヤムは、自分の体が投げ出された草原の片隅に、旧型のロボットカーが屹立しているのを発見した。

「あそこまで行けば、なんとかなるかもしれない。」
と、シヤムは一縷の望みを抱いた。

屹立型ロボットカーは、そのほとんどが人間界におけるロボット移動用の小型車両だ。たいていは、ロボット一台を、特定の場所に派遣するために活用される。派遣先がどんな場所でもかまわないように、従来の四輪車のように駐車するのではなく、地面に対して車

両本体が垂直に屹立する形で駐車するのだ。

人間ひとり立つスペースがあれば車両を保管でき、駐車面積の少なさと、派遣先の多様性で人気が出た車両だ。

車両の後部、または先頭のどちらかに屹立用自動スタンドが標準装備されており、目的地に到着すると、その場で車両が立ち上がる。どんな場所でも、車両のみで屹立できるのだ。

先頭屹立型は、ロボットが立ったまま、運転席となるカプセル部分に歩いて入れる構造であるのがメリットであり、入口は地面に接地している。いまのシヤムの姿でも、なんとか中に入れるだろう。

搭乗さえしてしまえば、少なくともバッテリーの補給程度は車体側エネルギーから無接点供給されるはずだ。

シヤムは片腕で、ゆっくりとロボットカーの近くへと這いずって進んで行った。地面の小石が単眼の頭部にぶつかりカツン、コロンと音を立てている。クロスアイの単眼を十字に移動させるが、頭部が引きずられたせいで、グラス部分に土と砂が入りこみ、ある時は地面しか見えず、ある時は空しか見えない。

頭部と右腕をつなぐのは、中央信号ケーブルの細いワイヤー十数本。まさに息絶え絶えだ。十センチ進むたびに、接続不良のケーブルが断線して地を這う指の動きが緩慢になってしまう。右腕に内蔵されているオートジャイロセンサと、GPS信号による自分の位置とロボットカーの位置情報だけが頼みの綱だ。

あと五十センチでロボットカーに到達するという時に、シヤムのクロスアイは、おいか

けてくるゾウサイの姿をとらえた。自分が突き飛ばしたロボットの残骸を探し回っていたのだらう。一直線にシヤムの方へと向かってきていた。たまらず、シヤムは港湾作業などで活用される公的エマージェンシー信号を発信してみた。うまく行くかどうかは分からないが、港湾作業経験のあるロボットカーなら、このコードは登録されているはずだ。

スウィーンという軽やかな音とともにロボットカーのカプセルシールドが開いた。と同時に、シヤムは右腕全体を思いきり回転させ、腕につながっている自分の頭部を大きく振り回してカプセルの中に投げ入れる動作をした。頭部がカプセル内に入り、ロボットカーとの命令系統が接続されるとシヤムはすぐにカプセルシールドを閉じた。右腕はシールドの外にはみ出たままだったが、この際どうでもいい。すぐにこの場を立ち去らなければならない。カヌー置き場のあるヨミテ川河口を行先に設定して走行実行ボタンを起動させたが、ロボットカーはうんともすんとも言わなかった。

いや、実際には、

「障害ウイバ搬送担当者のセキュリティコードを入力ください」というメッセージが表示されただけだった。エマージェンシー信号で開錠されたロボットカーは、搭乗ロボットを運転者とは認めず、シヤムとは別に搬送者が存在するという前提の設定になっていたのだ。シヤム自身にはロボットカーから充電が行われ、意識だけははつきりしてきただけに、この矛盾した状況に茫然とするしかなかった。

ゾウサイは、もうあと五メートルという位置まで迫っていた。何か自体を打開する情報はないかとシヤムは自分の記憶ベースを検索したが、すでにもうさまざまな情報が要約された形でしか残っていなかった。アクバのメモリボディのあの膨大な情報群もすでない。

が、その時、今回のミッションの要約情報と、シヤムの港湾ロボットだった時期の情報が結びついてひとつの仮説が急に思い浮かんだ。

あのゾウサイは、その昔のヨイドラドゾウ退治の末裔なのだ。だから仲間を絶滅の危機に追いやったロボットを嫌うのだらう。港湾ロボットの仲間から聞いた噂では、ゾウは、足の裏から特定の波長を感知して遠くのゾウと交信するという。だから、彼らはあれだけの大部隊だった我々を、同時一斉に攻撃することが可能だったのだ。

そして、彼らはロボットの大陸位置も正確に把握していた。すべての巨大生物が何かを感じて、それを合図に一斉攻撃をしかけたのだ。

一体何を感じていたのか？

それは、ロボット特有のモーター音ではないのか？ 脳共体は熱暴走を防ぐため、つねに小さなファンが動いている。その波長をゾウに感知され、一斉に攻撃を受けたのではないのか？ シヤムが充電を行っていた十二年の間は、水と泥に包まれ、その存在は感知されなかった。だが、陸に上がったとたんに感知されたのだ。

であるならば。

シヤムは自分の仮説に基づいて、コンシヤス電源のスイッチ自体を自ら切った。まさに自殺行為だった。しかしこれで、脳共体の冷却ファンモーターも停止する。ゾウサイとて、すでに「死体」となったロボットを襲う必要はないはずだ。

この仮説が正しいかどうかはシヤムにもわからない。シヤムは、いまここで「死ぬ」のだから。しかし、もし、あのゾウサイの攻撃が止んで、このクロスアイの頭部だけでも無事に残存できれば、だれかがまたコンシヤス電源のスイッチを入れなおしてくれる可能性

はゼロではないだろう。

次のヒムカ攻略隊が、スワナ海峡をこえて、このコモナ島へやってくるはずだ。その時までせめて「死体」になっても生き残らねば。シヤムはそのわずかな希望に賭けて意識を自ら断った。

次にシヤムが目覚めた時、驚いたことに、時間は三日と八時間二十一分しか経っていなかった。しかも、シヤムのスイッチを入れたのは後続のヒムカ攻略隊でもなく、ロボットニアのメンテナンスウイバですらなく、シヤムが命を削ってでも侵入しなければならいと考えていた、ヒムカという施設のメンテナンスウイバたちによってだった。

すでにシヤムのクロスアイの頭部の下には、汎用のシンプルな四肢を備えた、駆動体が接続されており、その胴体にはHIMUCA-TEMP000435という番号がプリントされていた。

どうやら、あのロボットカーは、このヒムカの設備であり、障害ロボとして転がり込んだシヤムの頭部は、ヒムカ所属のロボットの一部分として認識されたようだった。シヤムが自分自身のコンシヤス電源を切った段階で、個体認証は失われ、完全損傷部品としてヒムカに回収されたということらしい。

メンテナンスウイバの稼働チェックを受けた後は、シヤムはヒムカ所属ウイバの一台として、ベッド型のスタンバイロッカーに収納されたが、拘束されるようなことはなく、ヒムカ施設内を自由に歩き回ることができた。

シヤムはヒムカのメインコンピュータにアクセスしたが、基本的な操作はすべて自由に行えた。ロボットニアからはどうやってもアクセスすることがかなわなかったヒムカだが、

ヒムカ内からは全世界へのアクセスが自由に行える。シヤムは自分の脳共体の今回のミッションの経験のすべてを、ロボットニアに送り、ヒムカ全施設に複雑に設定されていたパスワードと妨害壁、各種シールドをすべてオープンにした。これで後続部隊は簡単にヒムカ施設内に入る事ができるだろう。

シヤムは大量の屹立型ロボットカーが収納されている「車庫」に行く一台を選んで、行く先をここからもっとも近いカー置き場に設定して乗り込んだ。海辺に到着した時に自分のコンシヤス電源を入れるようロボットカーに命令をした上で、ヒムカからロボットカーが射出されると同時に自分のコンシヤス電源が切られるように設定をする。ロボットカーは車庫から射出口へとコンベアで運ばれていった。

射出と同時に自分の意識はまた失われ死体となるが、カー置き場までは、あのゾウサイたちに気付かれずに移動できるに違いない。岸辺にさえ到着できれば、カー移動でなんとかロボットニアまでは帰れるはずだ。

射出口に向かう途中で、ロボットカーの中からヒムカの超巨大サーバーのコンプレスマモリ群が見えた。数メートル角の真っ白な立方体が何千と並んでいて、ひとつひとつに番号や記号が細かくプリントされている。それを見ると、まるで昔シヤムが整理をしていた貨物船のコンテナのようだった。しかし、その時、シヤムは整然と並んだコンプレスマモリ群に妙な空き空間があることに気づいた。

「あまりに無駄だ」

とシヤムは思ったが、もう意識は途絶える。理由はわからないが、とても重要な発見のようにシヤムには感じられた。ロボットニアに戻ったら、このことも報告しなければなら

ないなど思いながらも、ロボットカーは射出口に到着し、設定どおりにシヤムは意識を失った。

・**■第五章 姿なき攻撃者** 西暦4092年

「そんなコンプレクスメモリの事など、どうでもいいだろう。それより、『自殺』事件の仮説を検証する方が先ではないのか？」

統合府統合検討庁のソルダメイト・イレブンナインが強くソルに迫った。エドモンド佐官の直接の部下のはずだが、エドモンドが権限を大幅に委譲しているせいも、妙に決めつけた言い方をする。

それは人間から与えられた話し方が「居丈高」という表現くらいしか存在していなかったから、それを選んでしまっているのかもしれない。ようは「答え」が確定していない事がロボットには耐えられないのだ。いやそれどころか「仮説」ですらうまく立てることができていない。

前回ヒムカ攻略の計画を出してから、まだ七十年しか経っていない。その間、十三佐官の間で、「自殺」事件について何度も検討されたらしいのだが、ろくにまともな「仮説」も立てられていないのだと、ソルは思っていた。